

光岡辻ノ園

福岡県宗像市光岡所在遺跡の発掘調査報告

宗像市文化財調査報告書
第43集

1998

宗像市教育委員会

MITU OKA TUJI NO SONO

光岡辻ノ園

福岡県宗像市光岡所在遺跡の発掘調査報告

宗像市文化財調査報告書 第43集



1998

宗像市教育委員会



(1) S D 2 出土勾玉 (アマゾナイト製)



(2) S B 3 出土土器群

序 文

宗像市は、かつて純農村地帯でしたが、昭和36年の国鉄鹿児島本線の電化により福岡・北九州両大都市の通勤圏として注目され、大規模な宅地開発が進みました。昭和38年に始まった自由ヶ丘団地の造成、昭和41年に始まった日の里団地の造成、さらには2つの大学の進出が加わり、「快適生活都市・学術文化都市・高福祉都市」を3本の柱として発展を続け今日に至っております。

しかしながら各種開発事業は自然環境や歴史的景観の大幅な変化を伴うものであり、残念ながらほとんどの埋蔵文化財は消滅の危機にさらされ、緊急な対策を常に迫られています。

このような状況の中で失われ行く埋蔵文化財に対して、不十分ながらも記録保存に努め、多くの成果をあげてまいりました。

今回の報告書は、平成8年度に発掘調査を実施し、弥生時代中頃から中世にかけての集落跡を検出した光岡辻ノ園遺跡の記録を納めております。

本書が広く文化財保護および学術研究に貢献することを願いたしますとともに、発掘調査全般にわたってご協力をいただいた多くの方々に心からの感謝の意を表する次第であります。

平成10年3月31日

宗像市教育委員会

教育長 林 英 典

例 言

1. 本書は、平成8年度に国・県の補助を受けて実施した光岡辻ノ園遺跡（宗像市大字光岡965-1ほか）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は宗像市教育委員会が事業主体となって実施した。
3. 福岡県文化財番号は330796とする。
4. 遺構は呼称をすべて記号化し、竪穴住居および掘立柱建物はS B、柱穴はS P、土坑はS K、井戸はS Eとする。
5. 発掘調査は1・2区に分割して行ったが、遺構番号はその性格ごとにすべて通し番号である。
6. 本報告書の遺物番号は、すべて通し番号である。
7. 測量は国土調査法第Ⅱ座標系を用い、方位は磁北である。
8. 遺構の実測は安部裕久、岡崇が行った。
9. 遺物の実測は主に白木英敏、浅倉弥生、細川愛が行い、安部が補足した。
10. 遺構、遺物の製図は中原美知子、多比良佳奈子が、遺物の整理は西村広子、田代貞子、田崎紘子、東和子、濱田広美、浅倉が行った。
11. 遺構写真の撮影は安部、岡が、遺物写真の撮影は白木が行った。
12. S D 2出土勾玉の石材鑑定は、福岡教育大学助教授 上野禎一氏に依頼した。
13. 本書の執筆は第3章2を安部、他を白木が行い、編集は安部との協議の上、白木が行った。

本文目次

第1章 序説	1
1. 調査の経過	1
2. 組織と構成	2
3. 位置と環境	2
4. 調査の概要	2
第2章 調査の内容	7
1. 竪穴住居	7
2. 土坑	17
3. 井戸	25
4. 溝状遺構	26
5. 柱穴出土遺物	31
6. その他の出土遺物	33
第3章 まとめ	34
1. 各遺構の概要	34
2. S D 2 出土の勾玉について	35
付 光岡長把遺跡採集遺物	39
1. 発見の経緯	39
2. 位置と環境	39
3. 遺物の概要	39

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布地図 (1/25,000)	3
第2図 遺跡の位置図 (1/5,000)	4
第3図 光岡辻ノ園遺跡1区遺構配置図 (1/100)	5
第4図 光岡辻ノ園遺跡2区遺構配置図 (1/100)	6
第5図 S B 1・2 遺構実測図 (1/60)	8
第6図 S B 1・2 出土遺物実測図 (1/3)	9
第7図 S B 3～6 遺構実測図 (1/60)	11
第8図 S B 3 出土遺物実測図① (1/3)	12
第9図 S B 3 出土遺物実測図② (1/3)	13
第10図 S B 3 出土遺物実測図③ (1/3)	14
第11図 S B 4・7 出土遺物実測図 (1/3)	16
第12図 S B 7 遺構実測図 (1/60)	17
第13図 S K 1～10遺構実測図 (1/40)	18

第14図	S K 1・3・4 出土遺物実測図 (1/3)	19
第15図	S K 11～16 遺構実測図 (1/40・1/20)	20
第16図	S K 6・10・13 出土遺物実測図 (1/3)	21
第17図	S K 14・17 出土遺物実測図 (1/3)	23
第18図	S K 18・21・22 遺構実測図 (1/40)	24
第19図	S E 1 遺構実測図 (1/40)	25
第20図	S E 1 出土遺物実測図 (1/3)	26
第21図	S D 1・2 遺構実測図 (1/40)	27
第22図	S D 7～10・13・15 遺構実測図 (1/40)	28
第23図	S D 2・4・5・7・8 出土遺物実測図 (1/3)	28
第24図	S P 出土遺物実測図 (1/3)	30
第25図	その他の出土遺物実測図 (1/3)	32
第26図	光岡長把採集遺物実測図① (1/3)	40
第27図	光岡長把採集遺物実測図② (1/3)	41

表 目 次

表 1	試料分析一覧	35
表 2	X線マイクロアナライザーによる測定結果	36
表 3	アマゾナイト（天河石）製玉類出土地名表	37
表 4	光岡辻ノ園遺跡遺構一覧	38
表 5	光岡長把遺跡採集遺物一覧	42

図 版 目 次

巻頭カラー図版	(1) S D 2 出土勾玉（アマゾナイト製）	(2) S B 3 出土土器群
図版 1	光岡辻ノ園遺跡周辺の航空写真 (1/12,500) 昭和53年6月撮影	
図版 2	(1) 1 区全景（東から）	(2) 2 区全景（東から）
図版 3	(1) 1 区 S B 1（南から）	(2) 1 区 S B 2（北から）
図版 4	(1) 2 区 S B 3・4（東から）	(2) 2 区 S B 7（東から）
図版 5	(1) 1 区 S K 1（北から）	(2) 1 区 S K 6（東から）
図版 6	(1) 1 区 S K 13（西から）	(2) 1 区 S K 13・14（北から）
	(3) 1 区 S K 16（東から）	
図版 7	(1) 2 区 S E 1（南から）	(2) 1 区 S D 2 勾玉出土状況（南から）
図版 8	S B 1～3 出土遺物	
図版 9	S B 3 出土遺物	
図版 10	S B 3・4・S K 3・4・6・10・S E 1	
図版 11	S P 26・27・80・134・117 出土遺物・その他の出土遺物	
図版 12	S K 13 出土獣骨（ウシの下顎骨・成獣）	

第1章 序 説

1. 調査の経過

宗像市大字光岡に所在する光岡八幡宮の南側に、農地転用にともなう住宅および駐車場建築の計画があり、平成8年2月19日に宗像市教育委員会に対して文化財事前協議申請書が提出された。同地域は光岡遺跡群として周知されており、周辺の調査成果からも弥生時代から近世にかけての集落の存在が予想されたため、本教育委員会では同年2月28日から試掘調査を実施した。その結果、弥生時代から中世にかけての柱穴群や土坑、遺物の存在を確認した。このため、土地所有者との間で保存協議を行い、現状保存が困難な約1,142㎡について記録保存のための発掘調査を行う運びとなった。発掘調査は1区・2区に分割して行い、平成8年4月1日から着手し、同年5月3日で終了した。

2. 組織と構成

平成8年度 発掘調査組織構成

総 括	宗像市教育委員会	教 育 長	森 下 照 清
		教 育 部 長	中 野 和 人
		社会教育課長	藤 野 英 美
		文 化 係 長	原 俊 一
庶 務・会 計		主 任 主 査	織 戸 敏 子
発掘調査担当		主 任 技 師	安 部 裕 久
		技 師	岡 崇

平成9年度 報告書作成組織構成

総 括	宗像市教育委員会	教 育 長	林 英 典
		教 育 部 長	織 戸 勝 也
		社会教育課長	藤 野 英 美(前任)
			井 上 弘(現任)
		文 化 係 長	原 俊 一
庶 務・会 計		主 事	井 上 幸 恵
報告書担当		主 査	安 部 裕 久
		技 師	白 木 英 敏

3. 位置と環境

光岡辻ノ園遺跡は、福岡県宗像市大字光岡（字辻ノ園）965-1ほかに所在し、釣川左岸における支流の1つ、高瀬川の形成する標高10～14mほどの段丘面に立地する。高瀬川沿岸の地形では、上流の丘陵地域まで狭長な谷底平野が延び、谷底平野より広い中・低位段丘群が中・下流域に分布している（註1）。また、この遺跡のすぐ北側には光岡八幡宮が所在している。境内の大樟は県指定天然記念物で、胸高周囲9.2m、根回り24.0m、樹高28.6mを測り、地上8m付近から幹は三つに分岐している。枝張りたくましく森状をなし、遠見よくその存在を認め得る大木である（註2）。

光岡地区は近年、宅地や大型店舗などの各種開発事業が集中している地域で、以下にこの段丘面に立地する主な集落遺跡を見てゆきたい。

光岡原遺跡は弥生中期の円形住居を中心とする集落跡である。光岡六助遺跡は弥生後期～古墳前期にかけて営まれた集落跡で、方形住居15棟以上や旧河道が検出されている。5世紀代の方形4本柱住居からは、いわゆるL字状竈が検出されている。光岡番田遺跡は、弥生後期から古墳中期にかけての方形4本柱住居が2棟、旧河川などが検出されている。また鉄滓が竪穴住居内より出土しており、隣接する光岡六助遺跡でも同様の例がある。現在のところ、鍛冶炉などは検出されていないが、同段丘群の南部に位置する野坂一町間遺跡では5世紀頃の鍛冶炉が竪穴住居内から検出されていることから光岡地区でも鉄生産にかかわっていた可能性がある。これらの遺跡の分布する段丘群は、宗像第一の肥沃な平野に囲まれるなど、重要遺跡の立地条件を備えており、今後とも注目すべき地域である。

註

（註1）磯望1997「自然第2章第2節 3 釣川南岸と上流地域」『宗像市史』 通史編第1巻

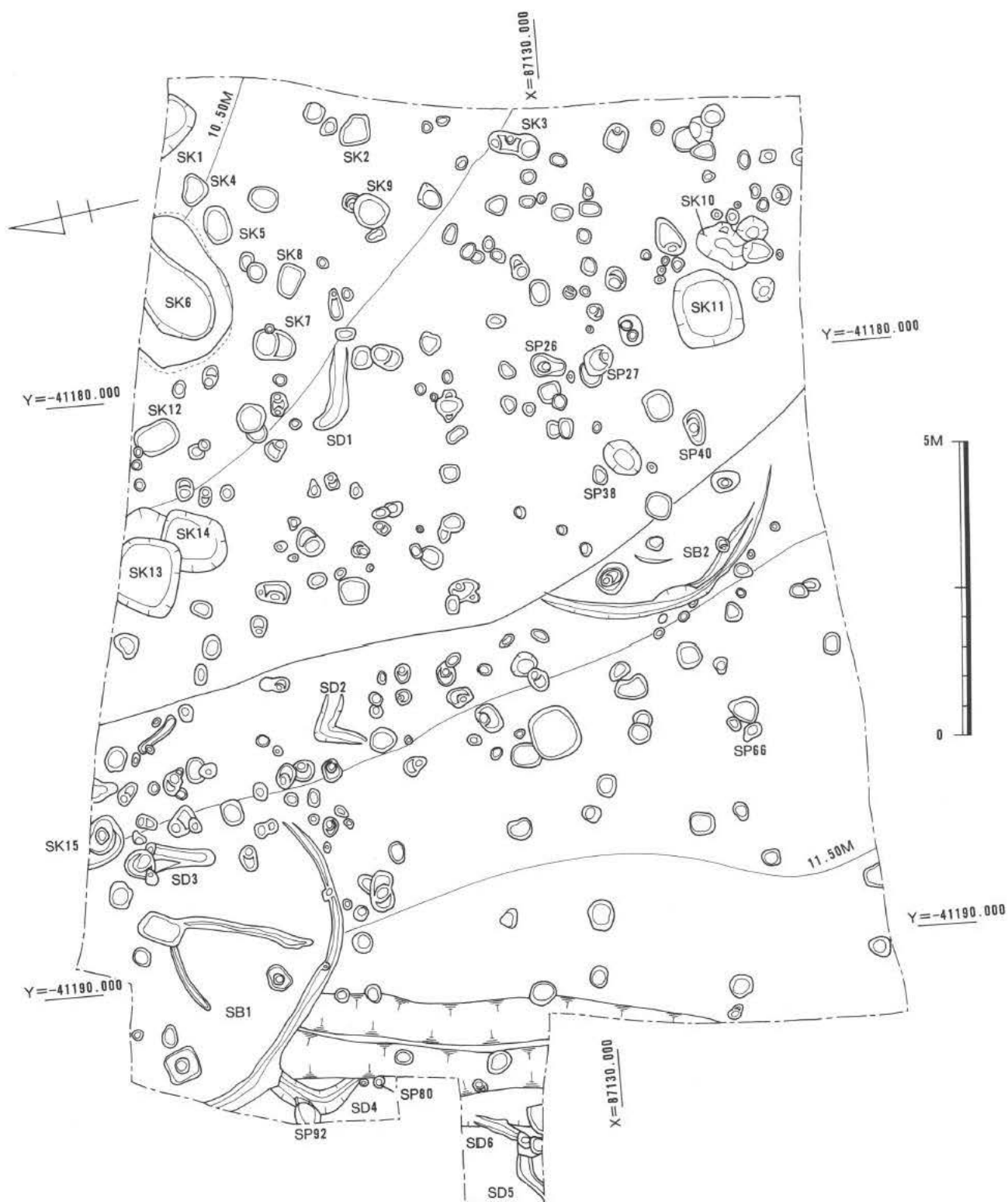
（註2）宗像市教育委員会1997『宗像の歴史散歩』宗像市文化財ガイドブック

4. 調査の概要

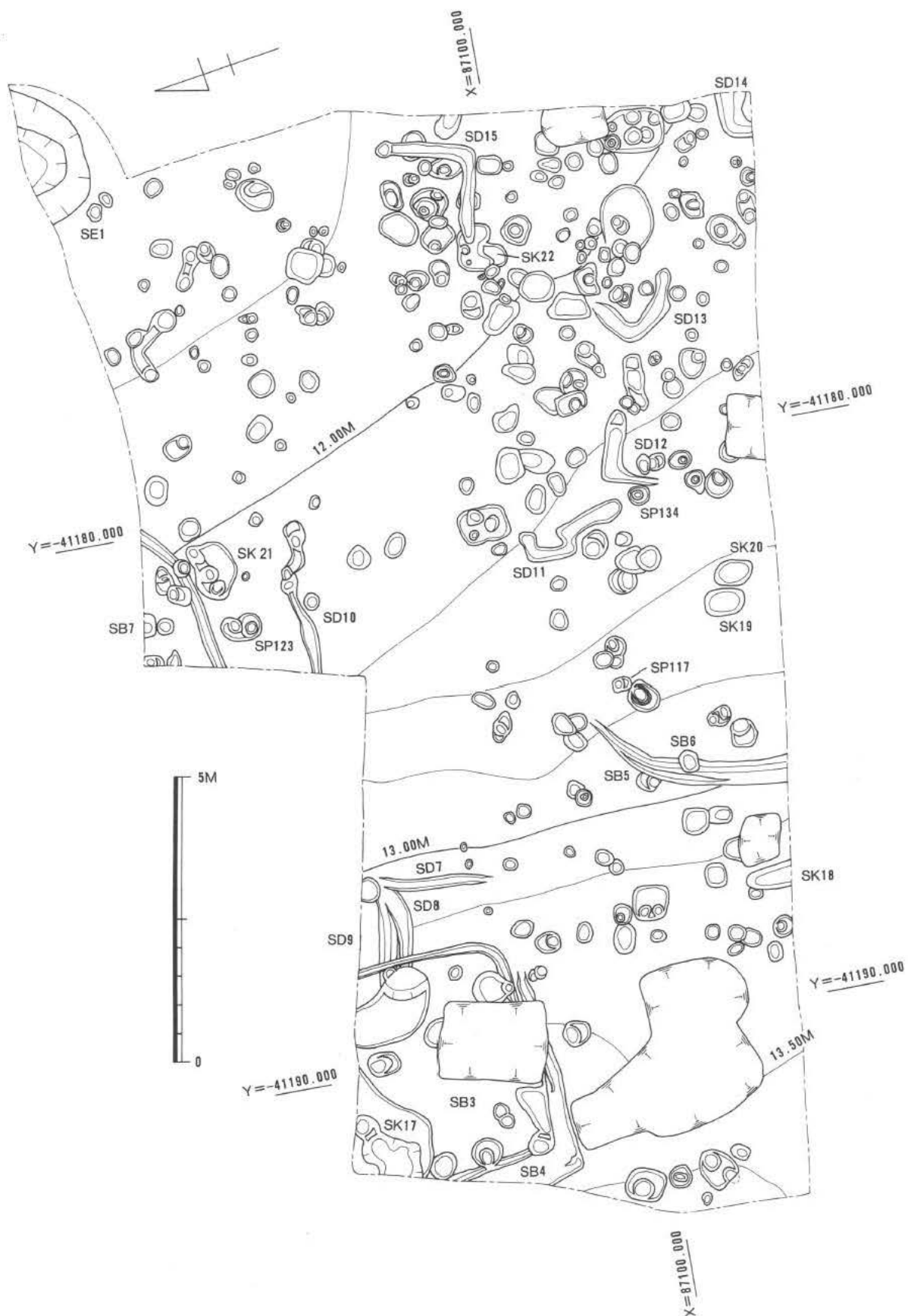
今回の調査区では、集落の全容を知ることはできなかったが、いくつかの重要な成果が上がっている。1区では弥生中期末～後期初頭の竪穴住居2棟、土坑16基、溝状遺構6条、中世の井戸1基、2区では弥生時代～庄内式並行期にかけての竪穴住居5棟、土坑6基、溝状遺構9条などを検出した。特に2区S B 3は庄内式並行期の良好な一括遺物が出土しており、当地域の弥生終末から古墳時代初頭の土器編年を考える上で貴重な資料である。



第2図 遺跡の位置図 (1/5,000)



第3図 光岡辻ノ園遺跡1区遺構配置図 (1/100)



第4図 光岡辻ノ園遺跡2区遺構配置図 (1/100)

第2章 調査の内容

1. 竪穴住居

SB1 (図版3、第5図)

1区の北西端に位置する円形住居跡である。北側は調査区外へと延び、規模は周壁溝が1/3程しか残存していないが、復元すると直径6m程、壁高は最も残りの良い南西部で0.5mを測る。中央部には隅丸長方形の屋内土坑があり、2条の屋内溝が接続している。主柱穴は調査区内に4ヶ所が残存しているが、本来6本柱であろう。

出土遺物 (第6図) すべて周壁溝からの出土である。

弥生土器 (001~008) 001~004は甕の口縁部片である。001~003は「く」字形に屈曲し、端部を平坦に収めている。002・003はいわゆる跳ね上げ口縁である。004は頸部から短く外反し、口縁端部は平坦に収め、刻目を施している。

005・006は壺である。005は口縁部片である。鋤先状口縁を成すが、かなり風化が進んでいる。006は肩部である。頸部直下に断面三角形凸帯が巡る。

007・008は甕の底部である。007は僅かに上げ底気味で、底端部はやや踏ん張り、胴部へと緩やかに外反しながら立ち上がる。縦方向のハケ目の後、底端部付近にヨコナデを施す。色調は灰橙色を呈し、底径5.4cmを測る。008は平底であるが、端部にやや丸味を持つ。2次焼成を受け風化が進んでいる。

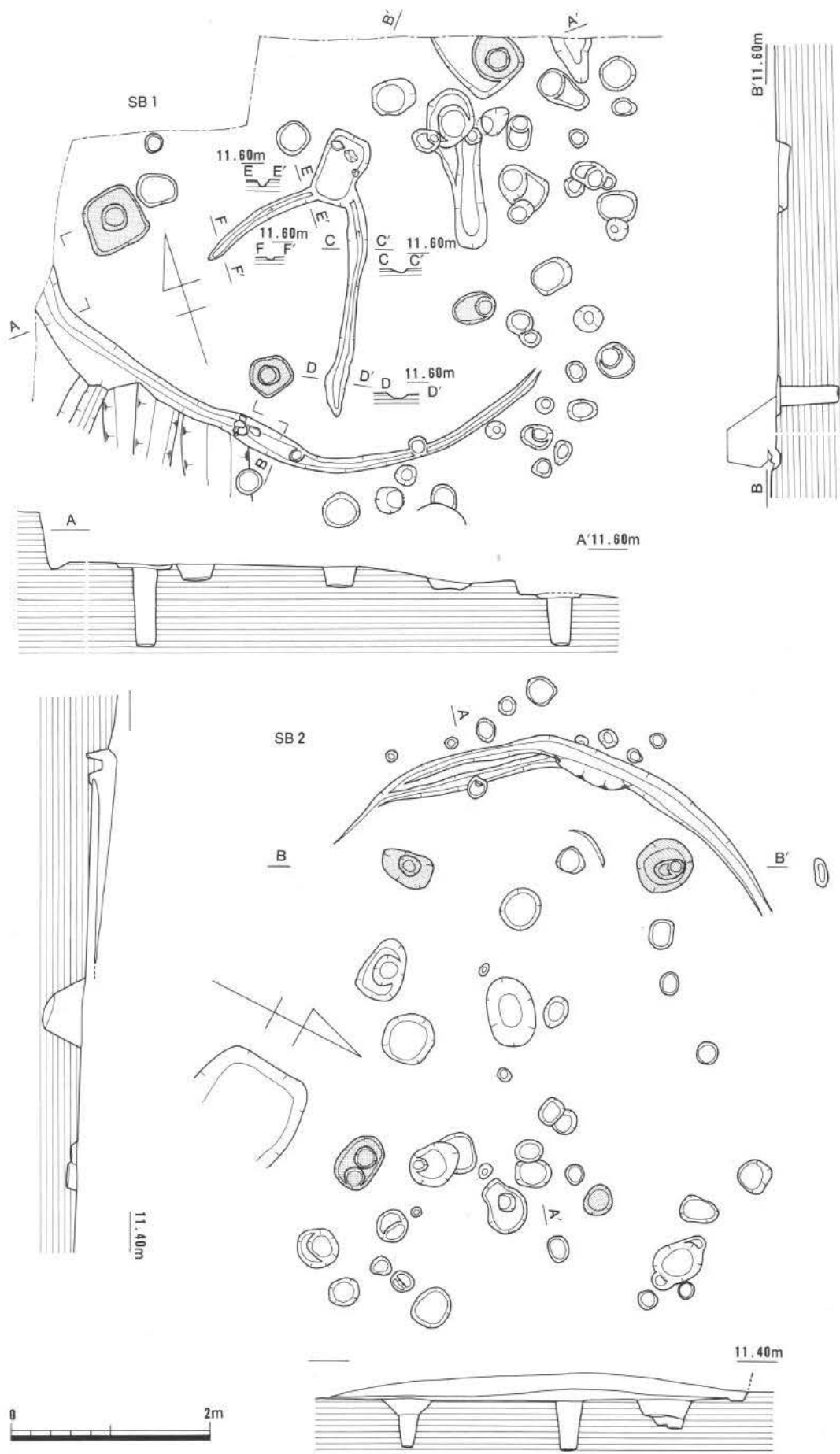
その他の遺物 (009) 鞆の羽口である。色調は黄褐色を呈し、一部に2次焼成の痕跡が残る。小片で混入品であろう。

SB2 (図版3、第5図)

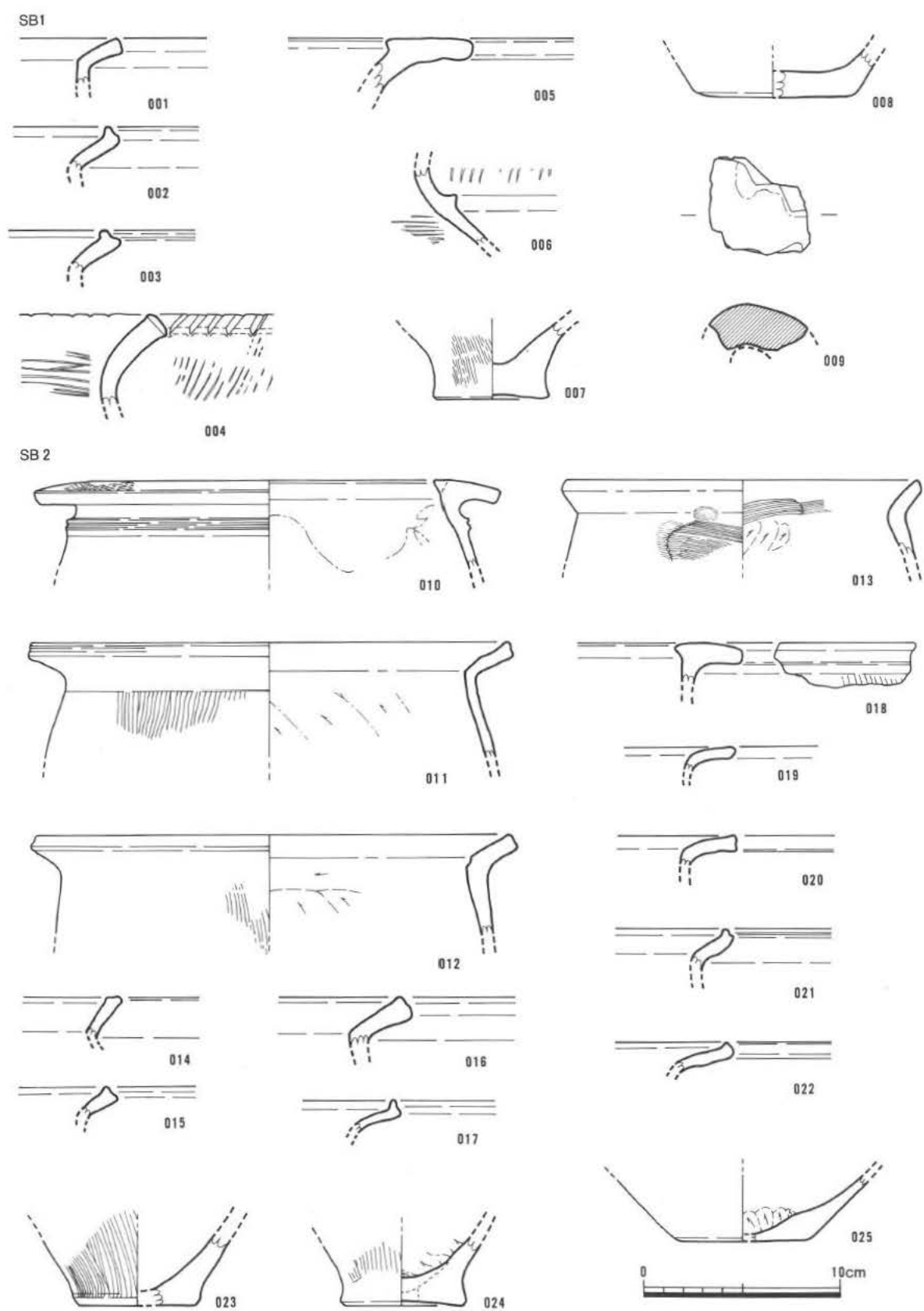
1区の中央南側に位置する残存不良の円形住居である。現状で10~25cm幅の周壁溝が僅かに残存し、一部では重複する。主柱穴はおそらくアミ掛け部の4本と考えられ、中央部には楕円形の屋内土坑を持つ。

出土遺物 (第6図) 010~012・018~022・024・025が屋内土坑、013~017・023が周壁溝からの出土である。

弥生土器 (010~025) 010~022は甕の口縁部である。010は丹塗磨研土器で、外面と内面の一部まで赤色顔料が残る。鋤先状口縁はやや垂れ下がり、頸部直下に断面M字形凸帯が巡る。復元口径16.8cmを測る。011は「く」字形に屈曲し、端部をかるく摘み上げた跳ね上げ



第5図 SB 1・2 遺構実測図 (1/60)



第6図 SB1・2出土遺物実測図 (1/3)

口縁で、端部外面に僅かに凹みをもつ。復元口径24.2cmを測る。012は丸味を持って短く外反し、端部外面を平坦に収める。胴部外面には縦方向のハケ目が残し、復元口径24.2cmを測る。019・020は鉢であるかもしれない。015～017・021・022は跳ね上げ口縁である。

023・024は甕の底部である。023は小片で風化が進んでいるが、底端部が面取りされている。復元底径5.9cmを測る。024は僅かに上げ底気味で、底端部はやや踏ん張り、胴部へと緩やかに外反しながら立ち上がる。縦方向のハケ目が施され、底端部付近はヨコナデである。底径6.0cmを測る。

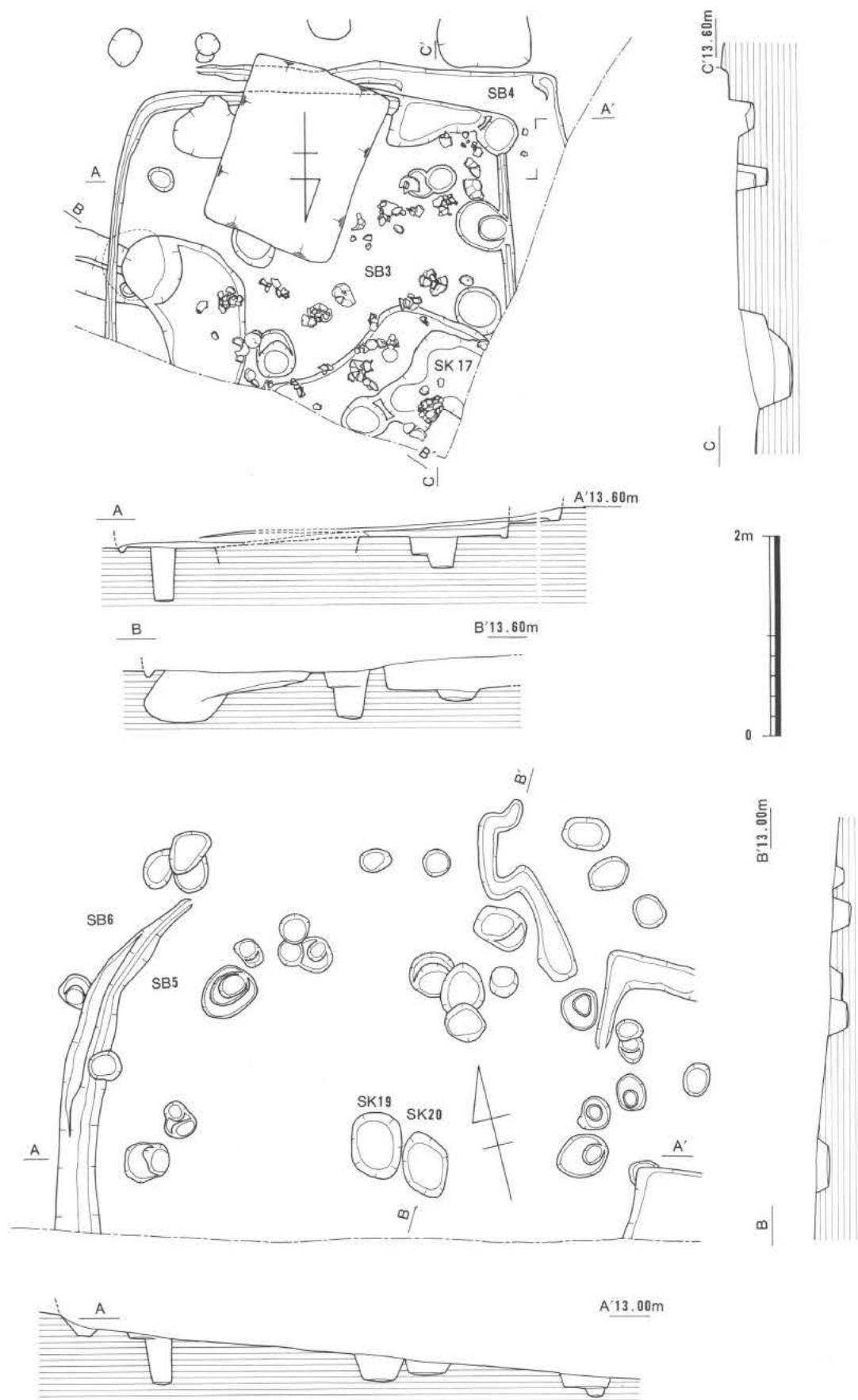
025は壺の底部である。平底で外傾して直状に立ち上がり、復元底径6.6cmを測る。

SB3 (図版4、第7図)

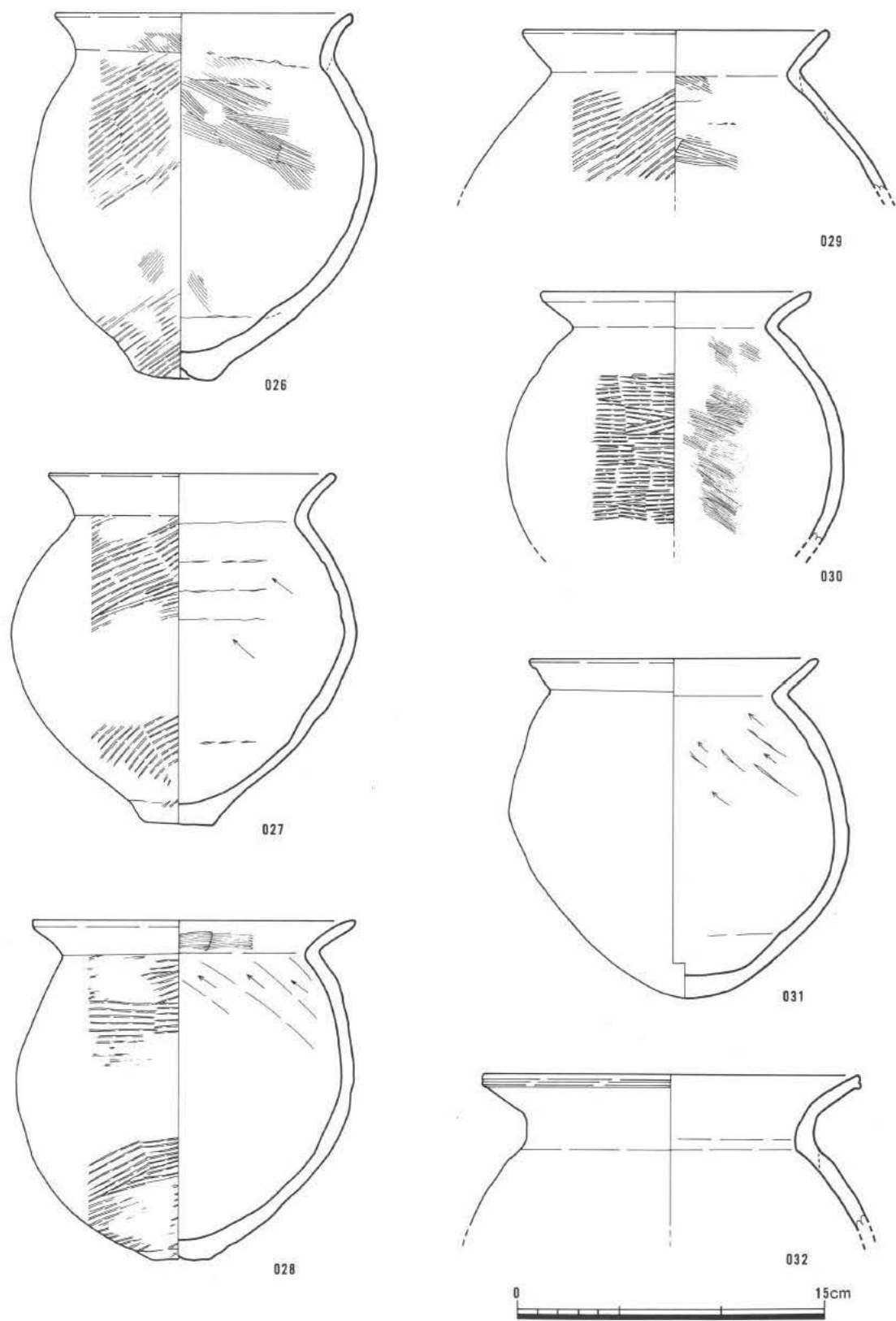
2区の西端に位置し、SK17、SB4を切る方形住居である。規模は4.2×3.5mを測り、主軸方位をNSに取る。壁際には周壁溝が巡り、北東隅に不整形の屋内土坑を付設する。壁高は最大で0.1m程残存するが、攪乱土坑の掘り込みなどによって支柱穴等については不明である。床面には庄内式並行期の土器群が遺棄されていた。

出土遺物 (第8～10図) ほとんどが床面出土遺物である。

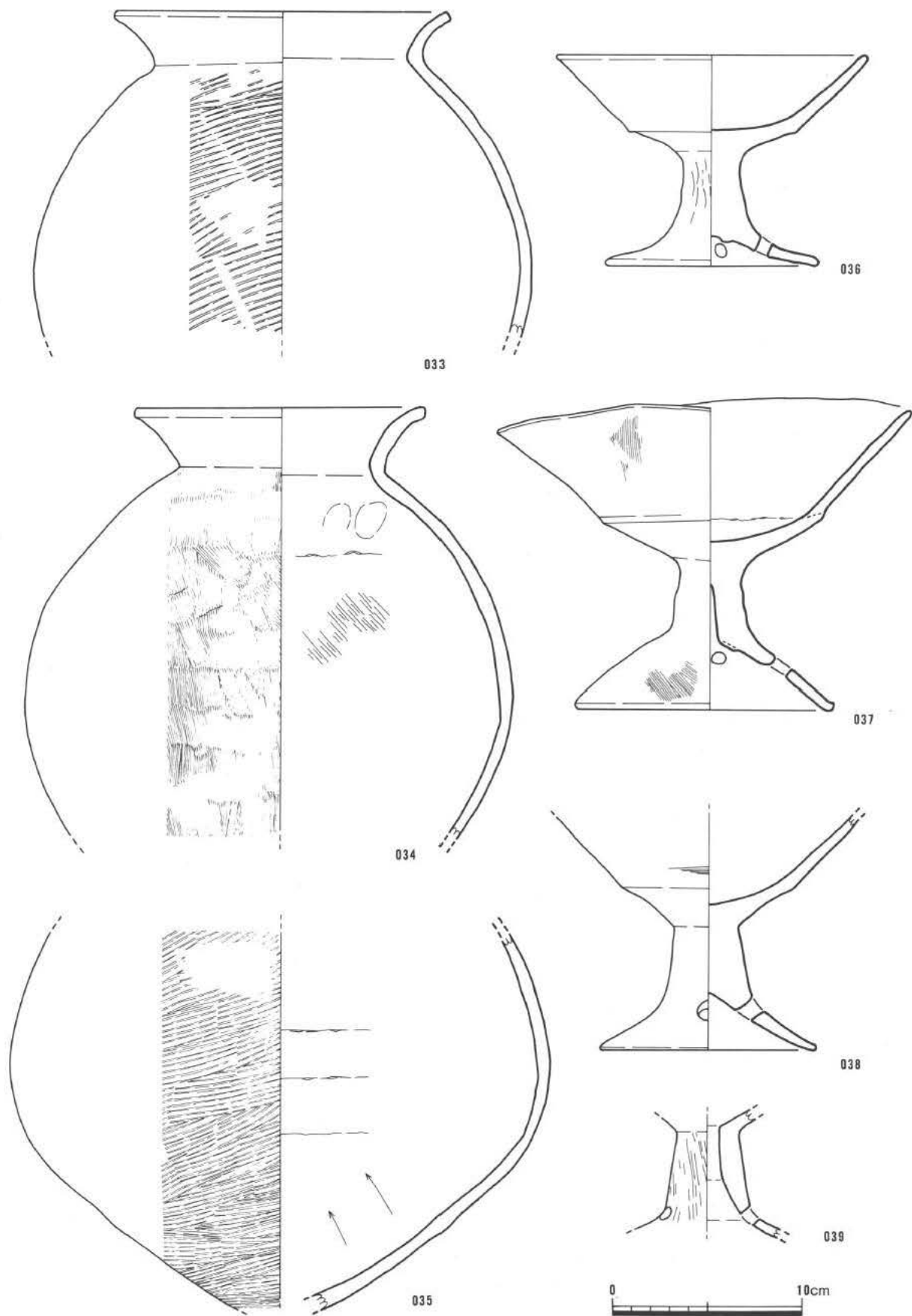
甕 (026～033・035) 026はほぼ完形品で、体部の中央部よりやや上位に最大径を持ち、底部は小さな平底で中央部に凹みを持つ。口縁部は緩やかに外反し、端部を丸く収める。体部外面には右上がりの平行タタキ、下半の一部にはハケ目が残存し、口縁部は外面にハケ目を施した後、ヨコナデを行っている。体部内面はハケ目が施されているが、頸部と底部付近に接合痕が残る。色調は赤橙色を呈し、口径14.4cm、頸部径12.6cm、底径4.2cm、器高18.1cmを測る。027は口縁部の一部を欠くがほぼ完形品で、体部の中央部よりやや上位に最大径を持ち、底部は小さく突出する平底である。口縁部は緩やかに外反し、端部を丸く収める。体部外面には右上がりの平行タタキ、内面はケズリの後ナデで仕上げている。風化が進んでいるが色調は赤橙色を呈し、口径13.9cm、頸部径11.4cm、底径3.6cm、器高17.2cmを測る。028は体部の一部を欠くがほぼ完形で、底部は尖り気味の平底で中央部に小さな凹みを持つ。体部は底部からの立ち上がりが内弯するため丸みを持ち、口縁部は強く「く」字形に屈曲し、端部を丸く収める。体部外面には右上がりおよびほぼ水平の平行タタキを施し、内面はケズリの後ナデで仕上げている。2次焼成を受けており風化が進んでいるが、色調は赤橙色を呈し、口径15.5cm、頸部径12.6cm、底径2.8cm、器高16.8cmを測る。029は体部下半を欠くが、口縁部は「く」字形に屈曲し、端部を丸く収める。体部外面には右上がりの平行タタキを施し、体部内面はハケ目が施されている。色調は明赤橙色を呈し、復元口径14.8cm、復元頸部径12.2cmを測る。030は底部付近を失う。体部外面には右上がりおよびほぼ水平の平行タタキ



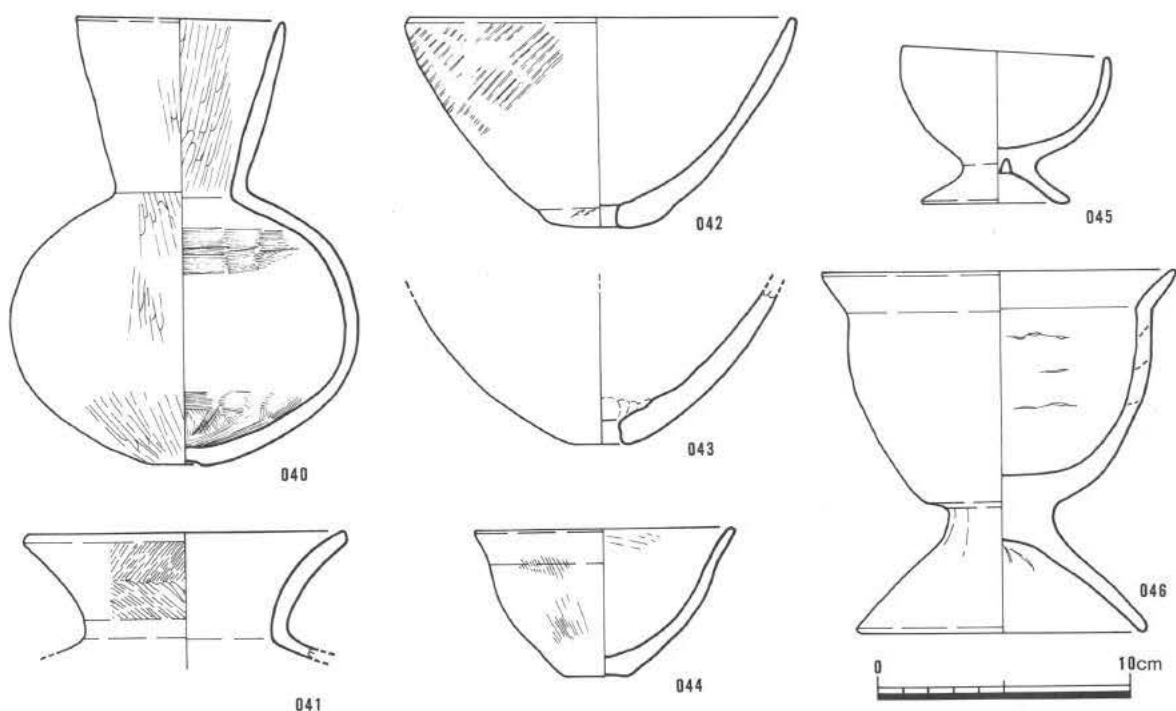
第7図 SB3～6遺構実測図 (1/60)



第8図 SB 3 出土遺物実測図① (1/3)



第9図 SB3出土遺物実測図② (1/3)



第10図 SB3出土遺物実測図③ (1/3)

を施し、内面はハケ目を施している。色調は赤橙色を呈し、復元口径13.2cm、復元頸部径10.0cmを測る。031は尖り気味の丸底で、口縁部は強く「く」字形に屈曲して僅かに内弯気味に立ち上がり、端部を丸く収める。外面はナデ、内面はケズリの後ナデで仕上げています。色調は灰橙色を呈し、底部付近に黒斑が見られる。口径14.0cm、頸部径11.5cm、器高16.6cmを測る。032は口縁部付近の破片である。口縁部は緩やかに外反し、端部外面に小さな凹みを持つ。色調は淡橙色を呈し、復元口径18.9cm、復元頸部径13.9cmを測る。033は短く外反する口縁部を持ち、端部を断面方形に収める。体部外面には右上がりの平行タタキ、内面は丁寧なナデで仕上げています。色調は橙色を呈し、口径17.4cm、頸部径14.2cmを測る。035は口縁部および底部を欠くが、尖り気味の丸底であろう。外面は右上がりの平行タタキ、内面は風化剥落のため不明瞭である。色調は橙色、体部最大径28.4cmを測る。

高坏 (036~038) 036は1/2ほどの破片である。柱状部は中実で、偏平気味に広がる裾部には透孔が3ヶ所に残存する。坏部は屈曲部で突出する小さな段を持ち、直状に外傾して立ち上がり、端部を丸く収める。色調は赤橙色を呈し、復元口径16.1cm、器高11.2cm、復元脚底径11.0cmを測る。037は坏部がやや歪んでいる。柱状部は肉厚でエンタシス状に膨らみ、裾部は透孔が4ヶ所に施され、内弯して「ハ」字状に広がる。坏部は屈曲部で小さな段をつくり、僅かに外反しながら大きく立ち上がる。外面はハケ目の後ナデで仕上げ、内面は風化が進んでいるがナデを行っている。色調は赤橙色を呈し、坏部外面には黒斑が残る。復元口径21.7cm、

器高16.3cm、脚底径13.4cmを測る。038は口縁部を欠く。柱状部は中実で裾部は透孔が4ヶ所に施され、偏平気味に「ハ」字状に広がる。全体に風化が進んでいるが、色調は赤橙色を呈し、脚底径11.2cmを測る。

器台(039) 039は器台の柱状部のみである。透孔が3ヶ所に施され、外面にはハケ目が残る。色調は橙色を呈する。

壺(034・040・041) 034は底部付近を失う壺である。体部中位に最大径を持ち、外面はハケ目、内面は削りの後ナデで仕上げている。色調は橙色を呈し、口径15.3cm、頸部径10.9cmを測る。040は長頸壺である。底部は僅かに凹んだ小さな平底で、体部は偏球形を呈する。口縁部は直状に立ち上がり、端部を丸く収める。外面および口縁部内面にはヘラ研磨、体部内面にはハケ目を施す。胎土は良好で微細な砂粒を含み、色調は赤橙色を呈する。口径8.1cm、頸部径5.3cm、底径2.2cm、器高17.7cmを測る。041は口縁部片である。外面には綾杉紋状にヘラ研磨を施す。胎土は精良で焼成良好、色調は明橙色を呈し、復元口径12.4cm、復元頸部径8.0cmを測る。

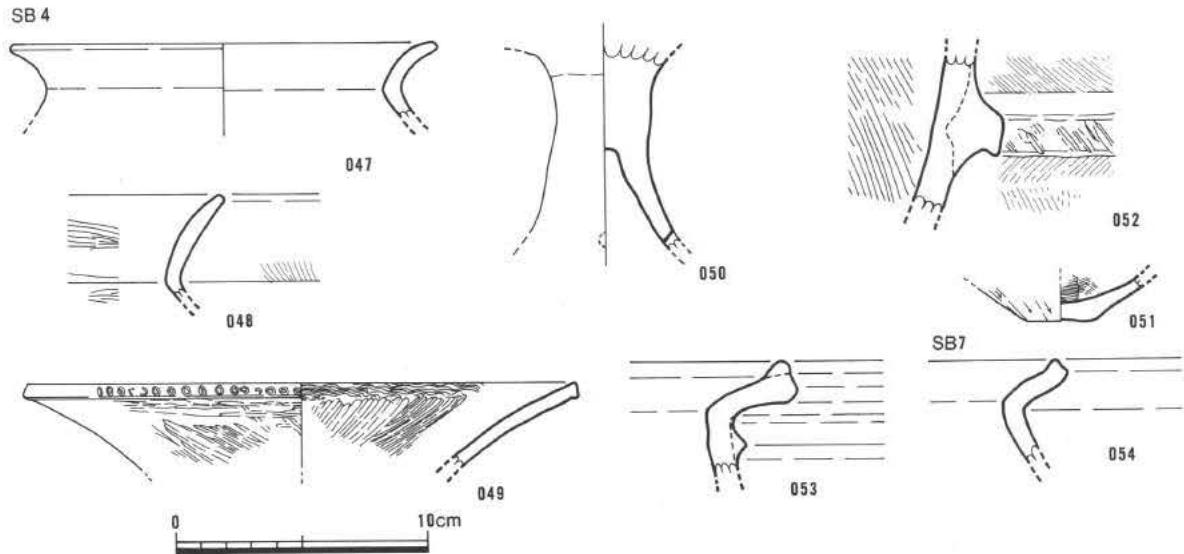
鉢(042～044) 042・043は有孔鉢である。042は突出した平底で、体部は内弯して立ち上がり、端部を丸く収める。風化が進んでいるが、外面は右上がりの平行タタキ、内面は丁寧なナデ仕上げである。色調は外面は赤橙色、内面には黒斑を有する。口径15.1cm、器高8.4cm、底径4.5cm、孔径0.9cmを測る。043は風化が進んでいるが、ナデ仕上げのようである。色調は灰橙色を呈し、孔径1.1cmを測る。044は平底で、体部は内弯しながら立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。口縁部内面と外面にはハケ目が残る。色調は淡橙色を呈し、復元口径10.2cm、器高5.9cmを測る。

台付鉢(045・046) 045は小形品である。裾部が「ハ」字状に開き、鉢部は丸みをもって立ち上がる。脚部内面には棒状の工具による刺突痕が残る。全体に風化が進んでいるが、調整は丁寧なナデであろう。胎土は微細な砂粒、赤褐色粒を含むが良好で、色調は赤橙色を呈する。復元口径8.1cm、器高6.1cm、脚底径5.6cmを測る。046は裾部が内弯気味に「ハ」字状に開き、鉢部は内弯しながら高く立ち上がり、口縁部は短く外反して端部を丸く収める。全体に粗雑なつくりで接合痕が残る。胎土はやや粗で色調は赤橙色を呈し、復元口径13.9cm、器高14.5cm、復元脚底径11.4cmを測る。

S B 4 (図版4、第7図)

2区の西端に位置し、S B 3に大半を切られる残存不良の方形住居である。規模は $3.65\alpha \times 0.7\alpha$ mを測る。壁際には断続的に周壁溝が残存するが、詳細は不明である。

出土遺物(第11図) 遺物量は少なく時期差もあり、当該住居に属するものがいずれである



第11図 SB4・7 出土遺物実測図 (1/3)

かは検討を要する。床面出土は051・052で他は覆土である。

土師器 (047～051) 047・048は甕である。047は口縁部の小片である。色調は2次焼成を受けて灰桃色を呈し、復元口径16.6cm、復元頸部径14.0cmを測る。048は口縁部の小片で、端部は丸みを帯びた方形に収める。内外面にハケ目調整が残り、色調は淡赤褐色を呈する。

049は二重口縁壺の2次口縁部であろうか。口縁部外面にはヘラ研磨、端部外面には細かな竹管文を施している。内面には波状文の後、ヘラ研磨を行っている。胎土は緻密で焼成も良好である。色調は明橙色を呈する。復元口径は21.8cmを測るが小片であるため若干疑問が残る。

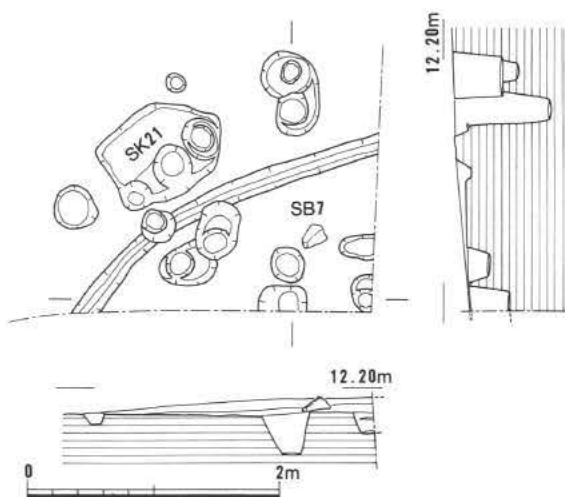
050は高坏の柱状部である。風化が進んでいるが色調は淡橙色を呈し、透孔が2ヶ所残存する。

051は鉢あるいは壺の底部であろう。僅かに上げ底の平底を呈する。外面はヘラ削り、内面には横位のハケ目が施されている。

弥生土器 (052・053) 大形の甕などの凸帯部である。風化が進んでいるが内外面ともハケ目で調整され、凸帯部には僅かに刻目が残る。053は跳ね上げ口縁を呈する甕の口縁部である。頸部直下には断面三角形の凸帯を巡らす。

SB5 (図版2、第7図)

2区の中央南端に位置し、SB6に切られる残存不良の円形住居である。SK19、あるいはSK20が屋内土坑である可能性が高いが、支柱穴についてもSB6と切り合うため詳細は不明である。出土遺物はほとんどが弥生土器の体部細片ある。図化できないが、跳ね上げ口縁の細片が1点含まれている。



第12図 SB7 遺構実測図 (1/60)

SB6 (図版2、第7図)

2区の中央南側に位置し、SB5を切る残存不良の円形住居である。SK20、あるいはSK19が屋内土坑である可能性が高いが、SB5と同様に詳細は不明である。出土遺物は弥生土器の細片が僅かで図化できるものはない。

SB7 (図版4、第12図)

2区の中央北端に位置する円形住居である。周壁溝が巡るが大半が調査区外へと延びているため詳細は不明である。

出土遺物 (第11図) 出土遺物は僅かである。

弥生土器 (054) 跳ね上げ口縁を呈する口縁部片である。風化が進んでおり調整は不明瞭で、色調は橙灰色を呈する。

2. 土坑

SK1 (図版5、第13図)

1区の北東隅に位置し、北側は調査区外にある。規模は現状で $0.95\text{ m} \times 0.75\text{ m}$ 、深さは 0.35 m を測る。

出土遺物 (第14図)

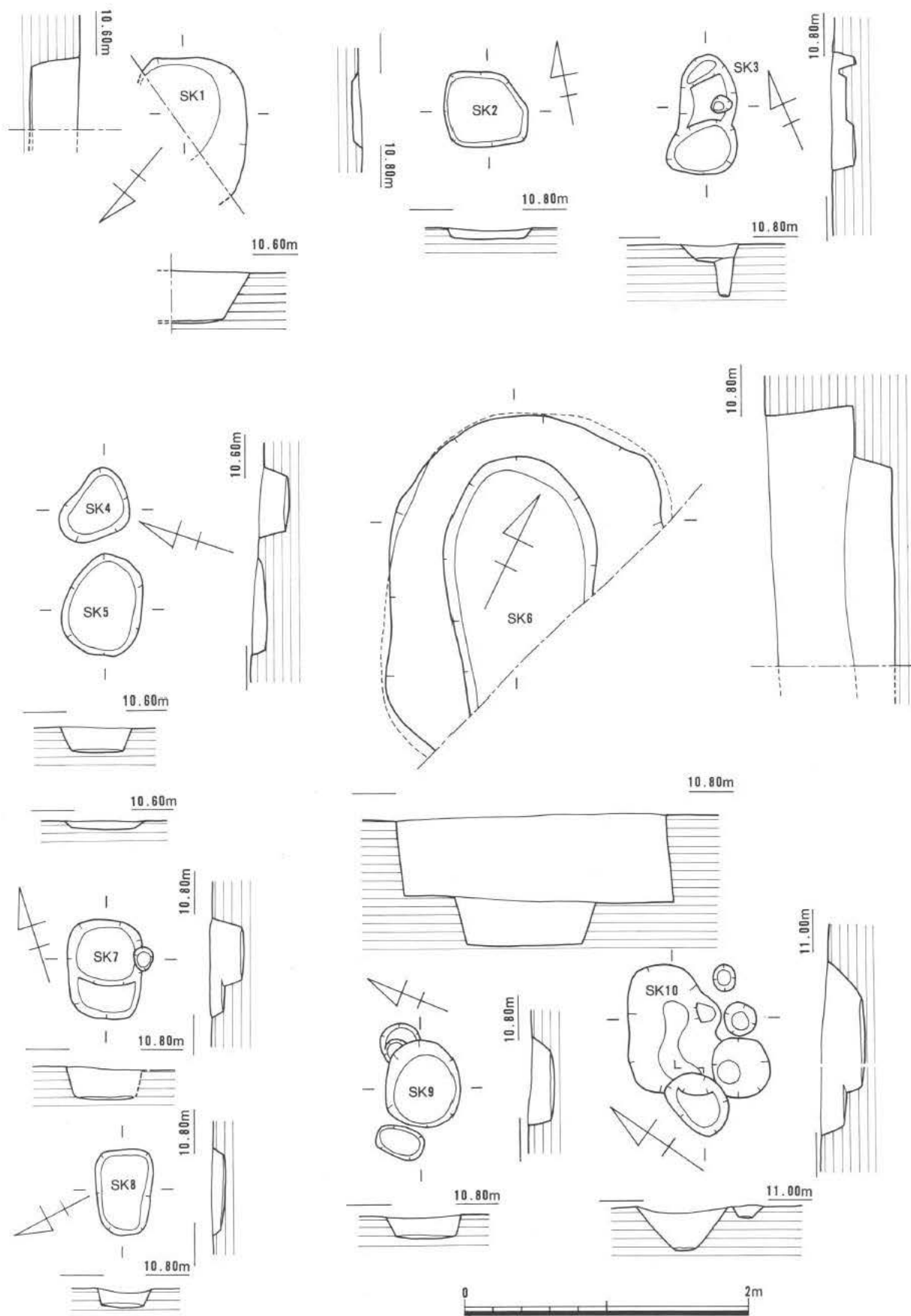
弥生土器 (055) 甕の口縁部片で鋤先状口縁を呈する。風化が進んでおり、色調は淡橙色で黒斑を有する。

SK2 (第13図)

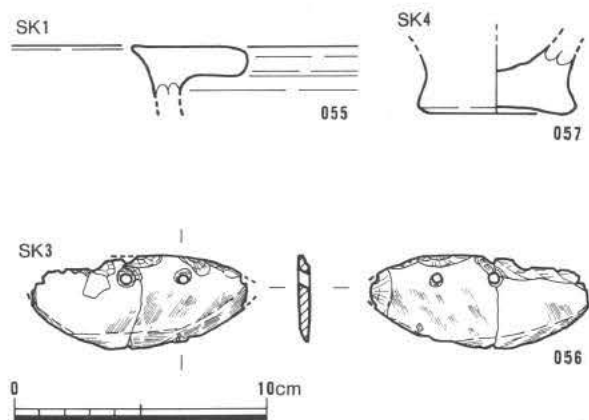
1区の東端に位置している。平面形は不整方形を呈し、規模は $0.58 \times 0.53\text{ m}$ 、深さは 0.05 m を測る。図化可能な出土遺物はない。

SK3 (第13図)

1区の東端に位置し、平面形は不整楕円形を呈する。規模は $0.85 \times 0.4\text{ m}$ 、深さは 0.1 m を測る。



第13図 SK1～10遺構実測図 (1/40)



第14図 SK1・3・4出土遺物実測図(1/3)

は0.2mを測る。

出土遺物(第14図)

弥生土器(057) 甕の底部である。上げ底気味の平底で、底径5.4cmを測る。

出土遺物(第14図)

石包丁(056) 輝緑凝灰岩質で、片側から斜方向に穿孔を行っている。厚さは最大で5mmを測る。

SK4(第13図)

1区の北東隅に位置し、平面形は不整楕円形を呈する。規模は0.52×0.4m、深さは0.2mを測る。

SK5(第13図)

1区の北東隅に位置し、平面形は楕円形を呈する。規模は0.7×0.55m、深さは0.05mを測る。図化可能な出土遺物はない。

SK6(図版5、第13図)

1区の北東部に位置し、平面形は不整楕円形を呈する。規模は2.3×1.9m、深さは0.85mを測る。

出土遺物(第16図)

弥生土器(058~068) 058~064は甕の口縁部片である。058は肩部はあまり張らず、口縁部は「く」字形に屈曲する。外面は荒いハケ目、内頸部にもハケ目が残る。059~064は跳ね上げ口縁で、059・060は頸部直下に断面三角形の凸帯を巡らす。

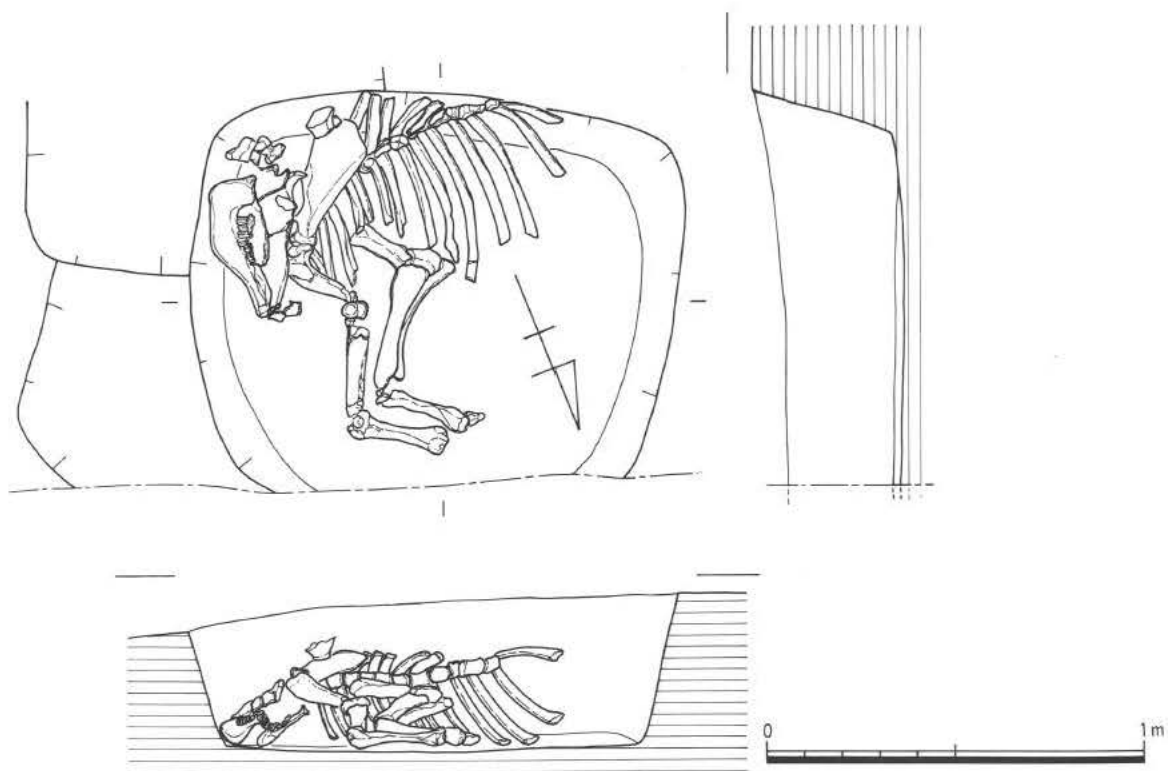
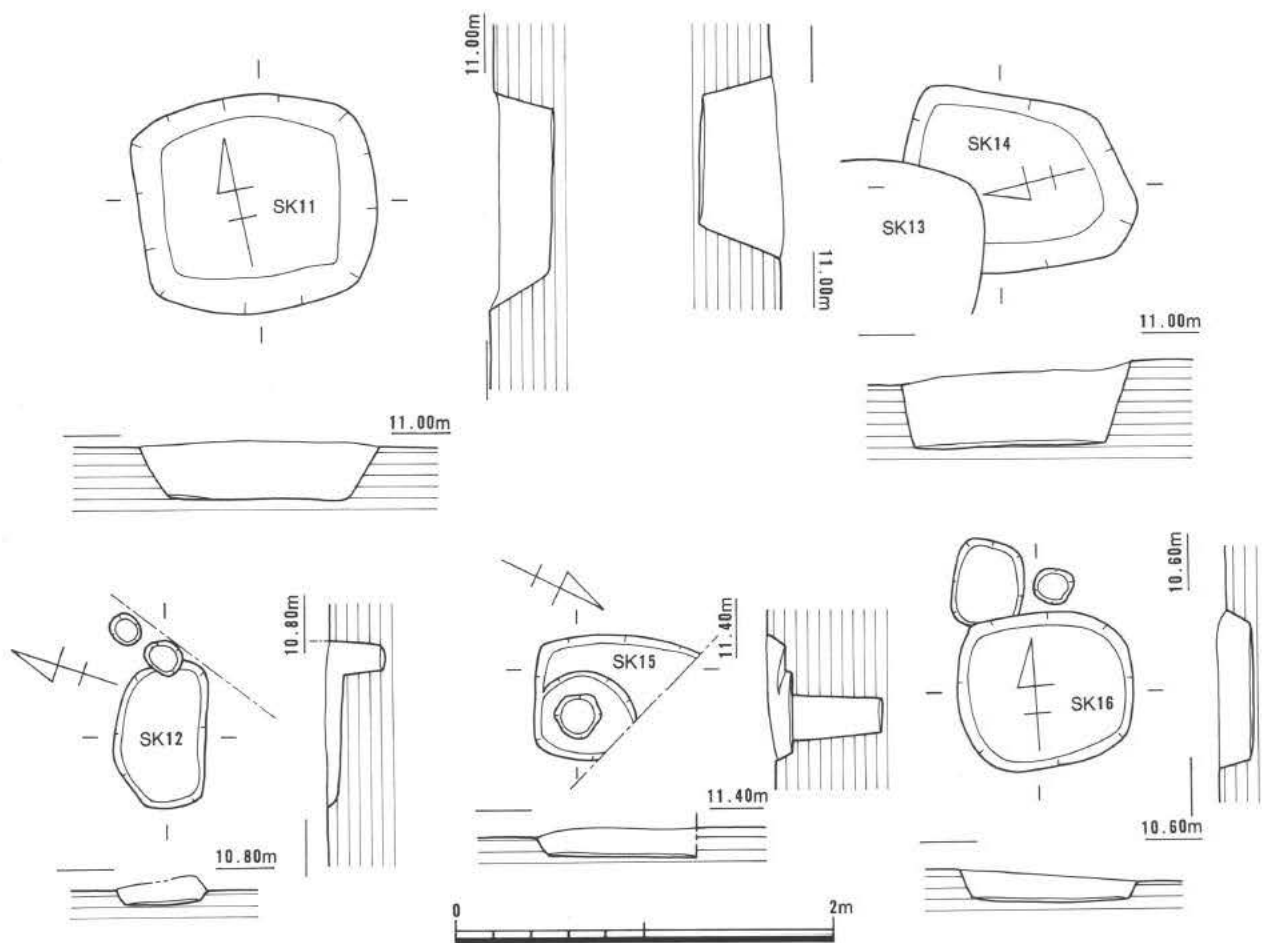
065は壺の頸部付近である。断面M字形の凸帯を二重に巡らし、凸帯間には暗文状の鋸歯文が施されている。

066・067は甕の底部である。066は底径5.8cmを測る。067は底部に焼成前の小さな凹みを持ち、底径6.3cmを測る。

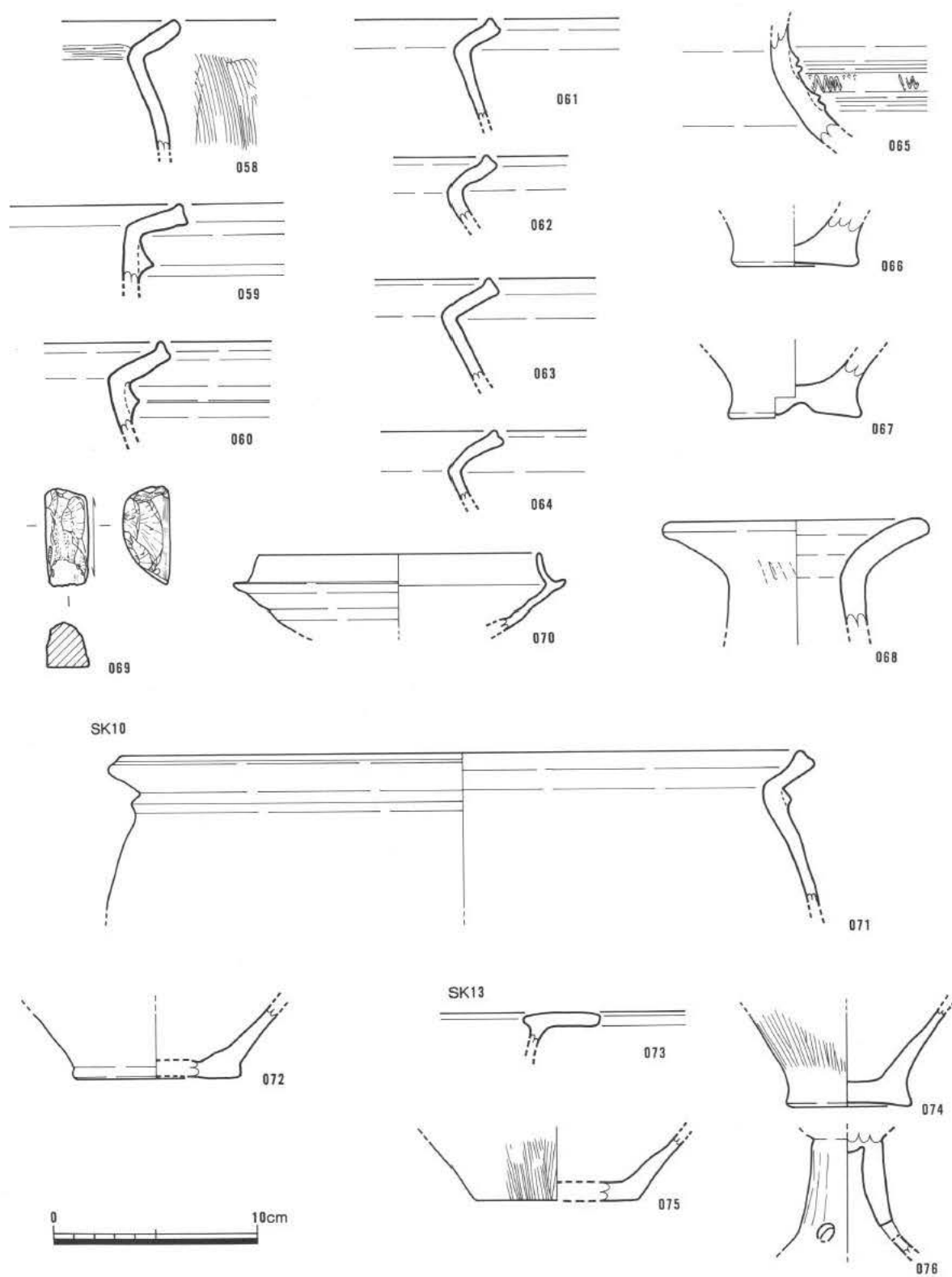
068は器台であろう。色調は明赤褐色を呈し、口径12.5cmを測る。

石器(069) 柱状片刃石斧である。刃部は鋭く仕上げられている。

その他の遺物(070) 須恵器の坏身である。復元口径13.7cm、受部径16.2cmを測る。須恵器はこの1点のみで、混入品と考えている。



第15図 SK11~16遺構実測図 (1/40・1/20)



第16図 SK 6・10・13出土遺物実測図 (1/3)

SK7 (第13図)

1区の北東部に位置し、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は $0.68 \times 0.51\text{m}$ 、深さは 0.25m を測る。図化可能な出土遺物はない。

SK8 (第13図)

1区の北東部に位置し、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は $0.6 \times 0.38\text{m}$ 、深さは 0.1m を測る。図化可能な出土遺物はない。

SK9 (第13図)

1区の東端部に位置し、平面形は楕円形を呈する。規模は $0.62 \times 0.53\text{m}$ 、深さは 0.15m を測る。図化可能な出土遺物はない。

SK10 (第13図)

1区の南東部に位置し、平面形は不整形を呈する。規模は $0.9\alpha \times 0.6\text{m}$ 、深さは 0.3m を測る。

出土遺物 (第16図)

弥生土器 (071・072) 071は跳ね上げ口縁を呈する甕である。頸部直下に断面三角形の凸帯を巡らす。内外面に赤色顔料が遺存しているが、風化が著しい。露胎部の色調は赤褐色を呈する。復元口径 33.2cm を測るが、小片のため疑問が残る。

072は平底の底部片である。復元底径 10.0cm を測る。

SK11 (第15図)

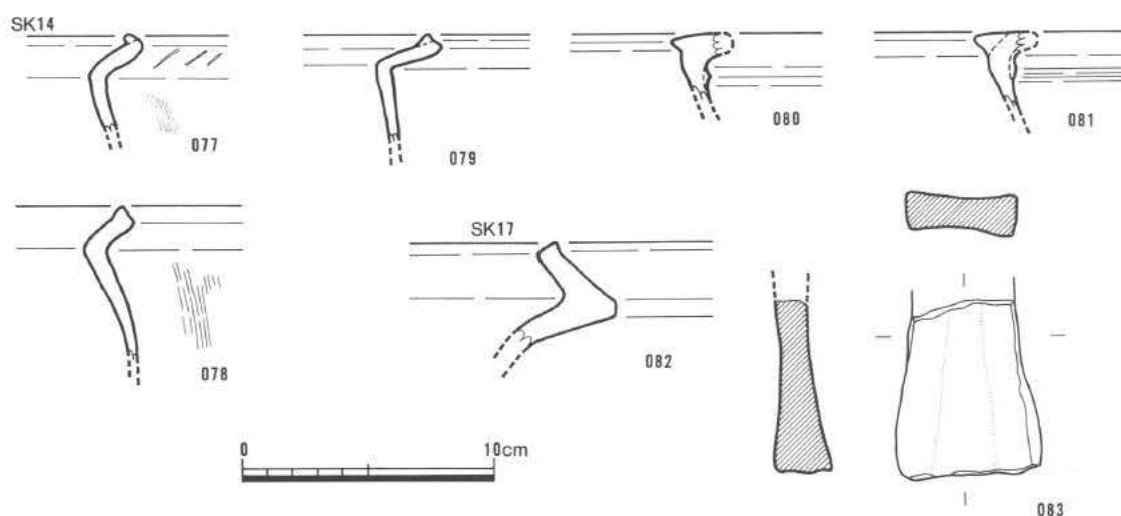
1区の南東部に位置し、平面形は隅丸方形を呈する。規模は $1.28 \times 1.15\text{m}$ 、深さは 0.3m を測る。図化可能な出土遺物はない。

SK12 (第15図)

1区の北端中央部に位置し、平面形は不整楕円形を呈する。規模は $0.78 \times 0.49\text{m}$ 、深さは 0.1m を測る。図化可能な出土遺物はない。

SK13 (図版6、第15図)

1区の北端中央部に位置し、SK14を切る。平面形は隅丸方形を呈し、規模は $1.28 \times 1.04\alpha\text{m}$ 、深さは 0.4m を測る。床面直上から牛骨が出土している。腰椎以下を失うが頭骨、肋



第17図 SK14・17出土遺物実測図 (1/3)

骨の良好な遺存状況から腐食したとは考えにくい。廃棄あるいは埋置の時点で存在しなかったのだろうか。出土遺物は僅かで、当該土坑の時期を示すとは考え難い。

出土遺物 (第16図)

弥生土器 (073～075) 073は偏平な鋤先状口縁の小片である。赤色顔料が僅かに残存している。074は甕の底部である。僅かに上げ底の平底で、底径5.9cmを測る。外面はハケ目調整で、底端部付近はヨコナデである。

075は壺の底部か。平底で外面はハケ目調整である。

土師器 (076) 透孔を持つ高坏の柱状部である。透孔は2ヶ所に残存し、復元すると3ヶ所であろう。

SK14 (図版6、第15図)

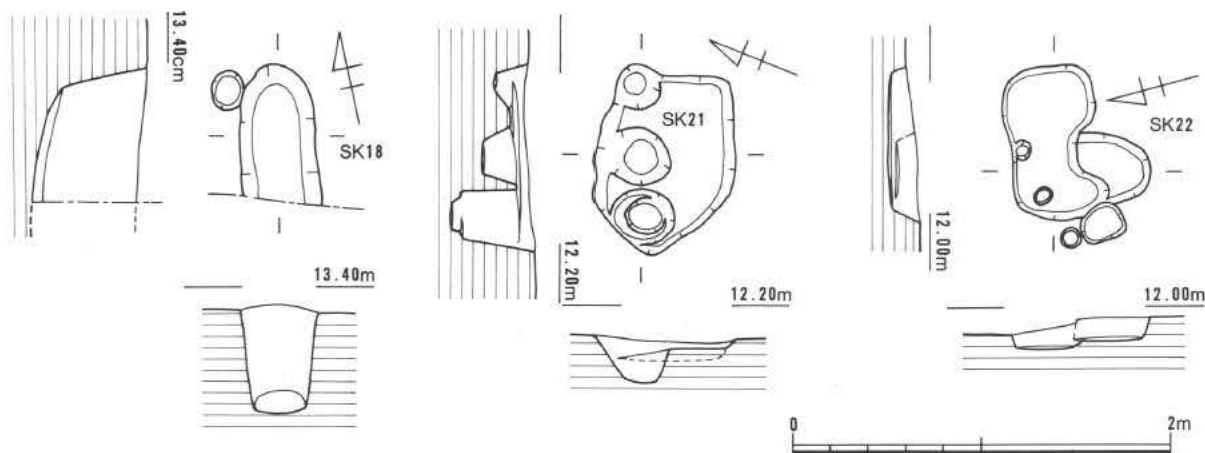
1区の北端中央部に位置し、SK13に切られる。平面形は不整隅丸台形を呈し、規模は $1.1\alpha \times 0.95\text{m}$ 、深さは0.4mを測る。

出土遺物 (第17図)

弥生土器 (077～081) 077～079は跳ね上げ口縁の甕である。080・081は鋤先状口縁の甕である。080は頸部直下に断面三角形凸帯が巡る。全体に風化が進んでいるが、内外面には赤色顔料が残存する。081は頸部直下に断面M字凸帯が巡る。全体に風化が進んでいるが、内外面には赤色顔料が残存する。

SK15 (第15図)

1区の北西端に位置し、SB1の主柱穴に切られる。平面形は不明で、規模は $0.95\alpha \times$



第18図 SK18・21・22遺構実測図 (1/40)

0.64m、深さは0.15mを測る。図化可能な出土遺物はない。

SK16 (図版6、第15図)

1区のほぼ中央部に位置し、平面形は楕円形を呈する。規模は 0.93×0.84 m、深さは0.2mを測る。図化可能な出土遺物はない。

SK17 (第7図)

2区の西端に位置し、SB3に切られる土坑である。平面形は不整形を呈し、規模は $1.9 \alpha \times 1.3 \alpha$ m、深さは0.55mを測る。

出土遺物 (第17図)

弥生土器 (082) 複合口縁の壺である。屈曲部には面をなし、口縁端部は上方にやや引き出している。

砥石 (083) 硬質砂岩製で、括れ部で欠損している。最大幅5.8cm、最大厚2.3cm、長さは現状で7.2cmを測る。中砥である。

SK18 (第18図)

2区の西部に位置し、北側は調査区外へと延びる。平面形は長楕円形であろうか。規模は $0.7 \alpha \times 0.4$ m、深さは0.55mを測る。図化可能な出土遺物はない。

SK19 (第7図)

2区のほぼ中央南端に位置し、平面形は不整楕円形を呈する。規模は 0.65×0.5 m、深さ

は0.3mを測る。S B 4あるいはS B 5の屋内土坑である可能性が高い。図化可能な出土遺物はない。

S K 20 (第7図)

2区のはば中央南端に位置し、平面形は不整楕円形を呈する。規模は0.55×0.45m、深さは0.17mを測る。S K 19と同様に、S B 4あるいはS B 5の屋内土坑である可能性が高い。図化可能な出土遺物はない。

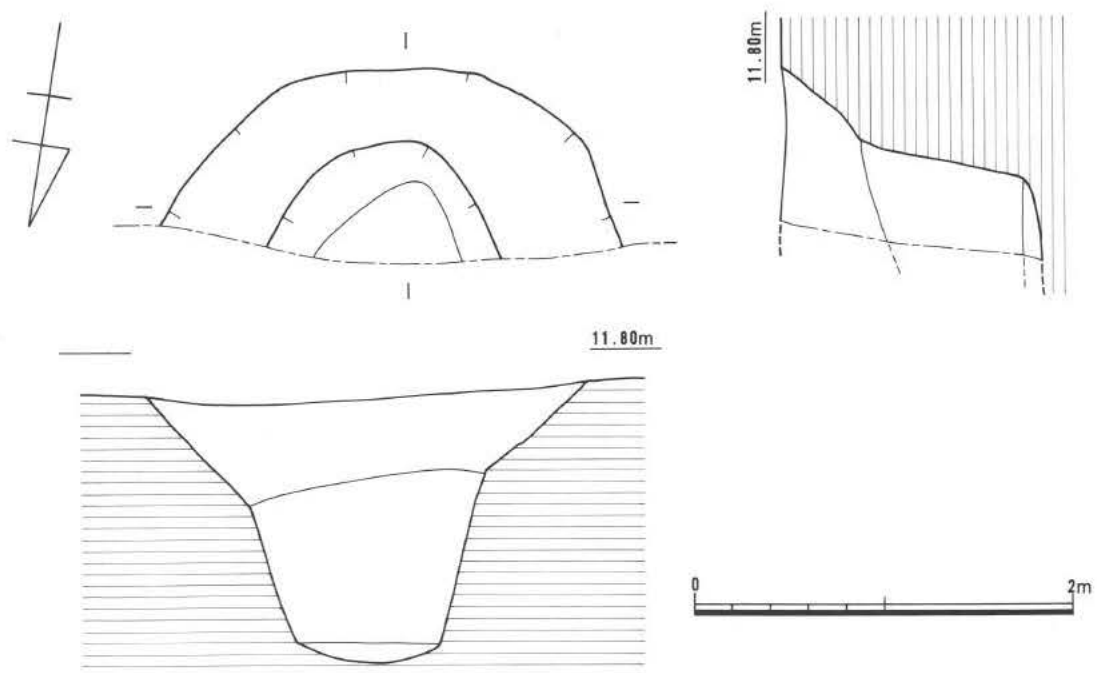
S K 21 (第18図)

2区の北端中央部、S B 7の北側に位置し、平面形は不整台形を呈する。規模は0.95×0.75m、深さは0.05mを測る。図化可能な出土遺物はない。

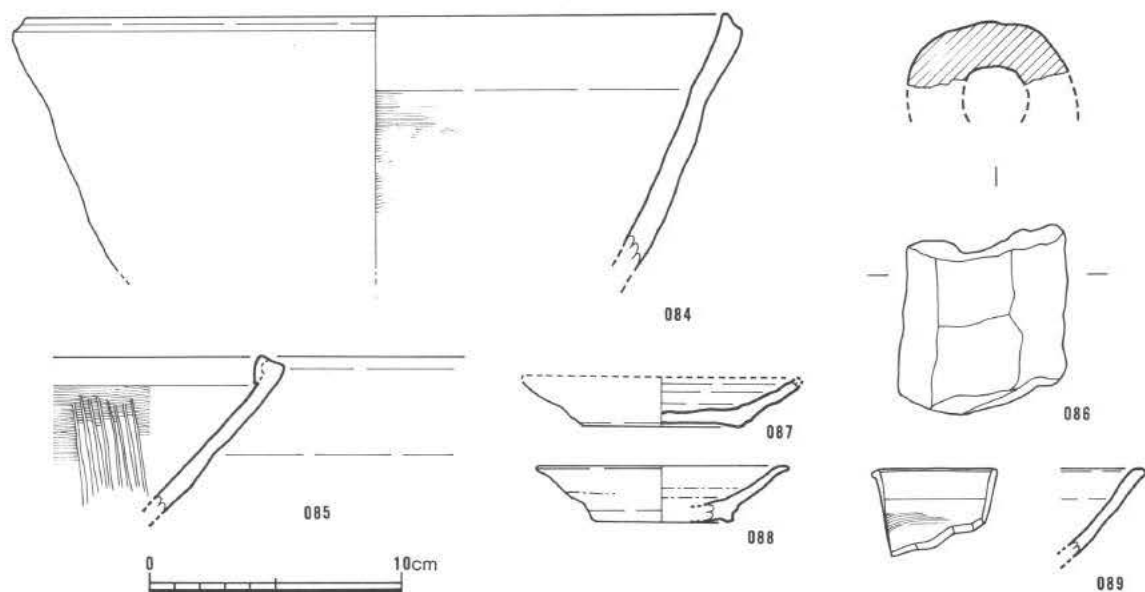
S K 22 (第18図)

2区の東部に位置し、S D 15に切られる。平面形は不整形を呈し、規模は0.82×0.45m、深さは0.15mを測る。図化可能な出土遺物はない。

3. 井戸



第19図 S E 1 遺構実測図 (1/40)



第20図 SE1出土遺物実測図 (1/3)

SE1 (図版7、第19図)

2区の北東隅に位置し、ほぼ1/2は調査区外へと延びる。平面形は不整円形であろう。規模は $2.45\text{m} \times 1.0\text{m}$ 、深さは 1.45m を測る。

出土遺物 (第20図)

瓦質土器 (084・085) 084は鍋である。復元口径 28.6cm を測る。085は鉢である。

土師器 (087) 糸切底の小皿で、口縁端部を僅かに欠く。色調は赤橙色を呈し、復元口径 10.8cm 、復元器高 2.0cm 、底径 6.2cm を測る。

陶磁器 (088・089) 088は白磁の小皿である。復元口径 9.9cm 、器高 2.3cm 、底径 5.6cm を測る。施釉は内面と体部外面の上半までで、見込み部分は環状に掻きとっている。089は青白磁碗の口縁部片である。内面には沈線と櫛描きの一部が残る。

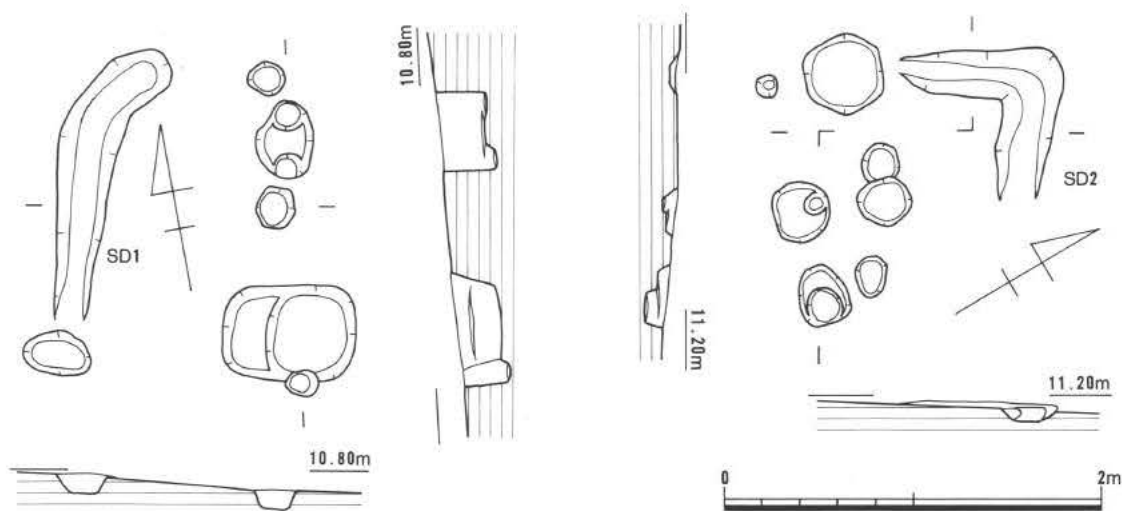
その他の遺物 (086) 轆の羽口である。色調は赤褐色から黄褐色を呈する。

4. 溝状遺構

SD1 (第21図)

1区の北東部に位置し、規模は現状で長さ 1.6m 、幅 0.3m 、深さは 0.1m を測る。図化可能な遺物はない。

SD2 (図版7、第21図)



第21図 SD1・2遺構実測図 (1/40)

1区の北西部に位置し、L字形を呈する。規模は現状で長さ1.35m、幅0.3m、深さは0.05mを測る。方形住居のコーナー部分の可能性もあるが、詳細は不明である。

出土遺物 (第23図)

石器 (090) アマゾナイト製の勾玉である。全長3.4cm、幅2.1cm、厚さ0.6cm、孔径0.4cmを測る。この遺物については第3章2を参照されたい。

SD3 (第3図)

1区の北西隅に位置し、直状に延びる。規模は現状で長さ1.2m、幅0.3m、深さは0.1mを測る。図化可能な遺物はない。

SD4 (第3図)

1区の北西端に位置し、緩いL字形を呈する。規模は現状で長さ1.5m、幅0.35m、深さは0.45mを測る。

出土遺物 (第23図)

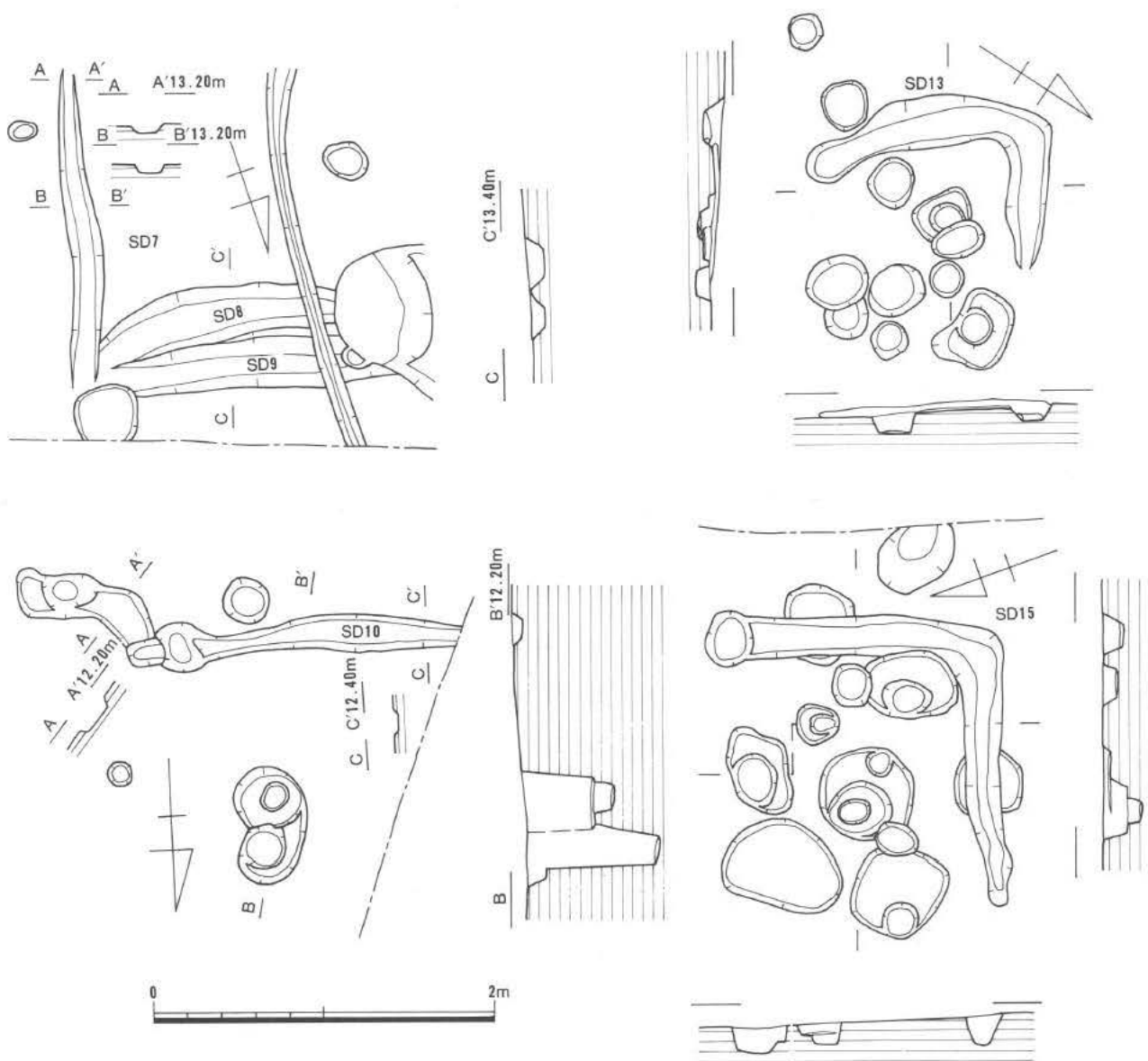
土師器 (091・092) 091は甕の口縁部片である。復元口径14.8cmを測る。

092は高杯の裾部片である。かろうじて透孔が残存する。

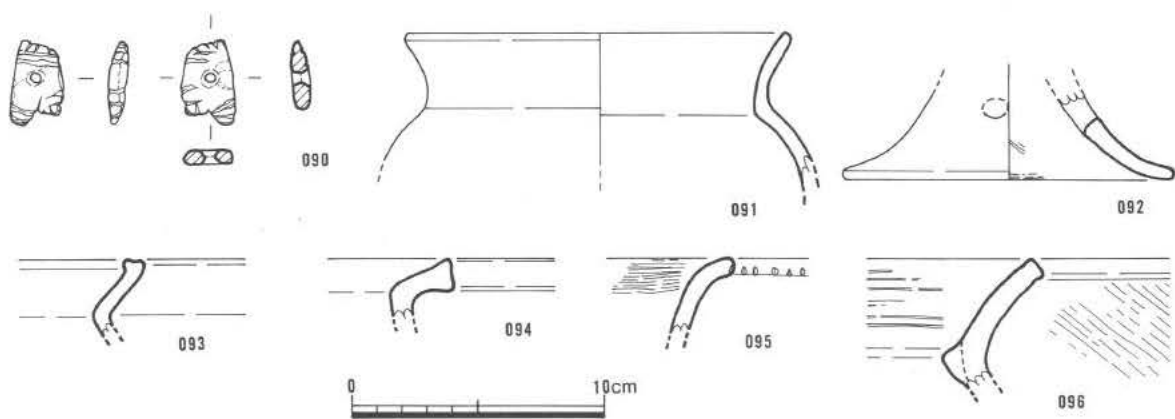
SD5 (第3図)

1区の西端に位置する。SD6と一連のものかもしれないが詳細不明である。

出土遺物 (第23図)



第22図 S D 7 ~ 10 ・ 13 ・ 15遺構実測図 (1/40)



第23図 S D 2 ・ 4 ・ 5 ・ 7 ・ 8出土遺物実測図 (1/3)

弥生土器 (093) 跳ね上げ口縁の小片である。

SD 6 (第3図)

1区の西端に位置する。SD 5と一連のものかもしれないが、詳細不明である。図化可能な遺物はない。

SD 7 (第22図)

2区の西部に位置し、直状に延びる。規模は現状で長さ1.9m、幅0.18m、深さは0.05mを測る。

出土遺物 (第23図)

弥生土器 (094) 094は跳ね上げ口縁の小片で、口縁端部をつまみ上げている。

SD 8 (第22図)

2区の西部に位置し、住居の周壁溝の可能性はあるが、詳細は不明である。

出土遺物 (第23図)

弥生土器 (095・096) 095は甕の口縁部片である。口唇部には刻み目が施されている。096は口縁部の小片であるが、内頸部に断面三角形の凸帯を貼り付けている。

SD 9 (第22図)

2区の西部に位置し、住居の周壁溝の可能性はあるが、出土遺物はなく詳細は不明である。

SD 10 (第22図)

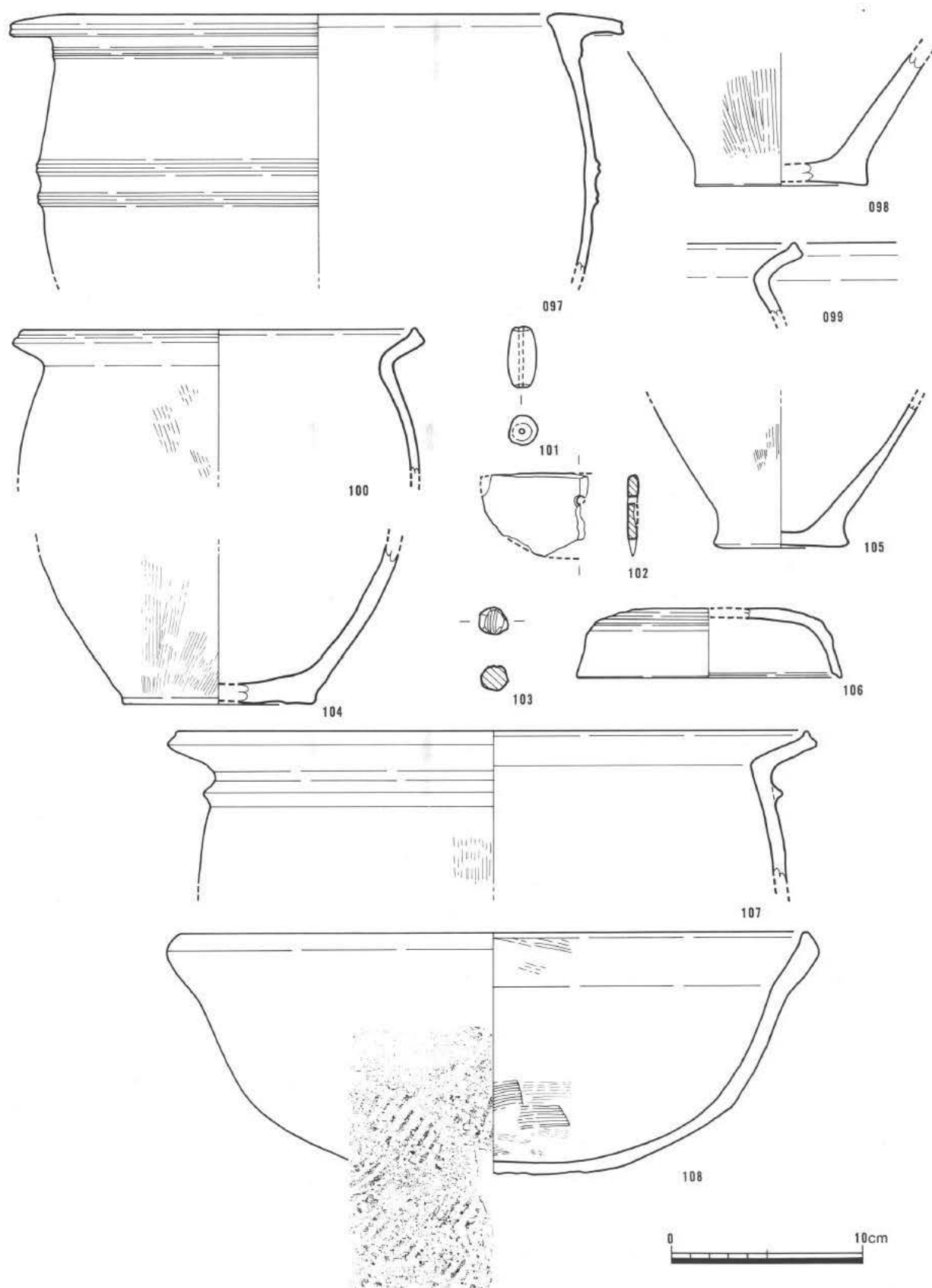
2区の北部、SB 7の南側に位置し、規模は現状で長さ2m、幅0.22m、深さ0.06mを測る。弥生土器片が僅かにあるが、図化可能な遺物はない。

SD 11 (第4図)

2区のほぼ中央部に位置し、鍵形を呈する。規模は現状で長さ2.45m、幅0.3m、深さ0.06mを測る。土師器、須恵器片があるが、図化可能な遺物はない。

SD 12 (第4図)

2区のほぼ中央部に位置し、L字形を呈する。規模は現状で長さ1.85m、幅0.32m、深さ0.1mを測る。出土遺物はない。



第24図 SP出土遺物実測図 (1/3)

S D 13 (第22図)

2区の東部に位置し、略L字形を呈する。規模は現状で2.05m、幅0.25m、深さ0.15mを測る。弥生土器片が僅かにあるが、図化可能な遺物はない。

S D 14 (第4図)

2区の南東隅に位置し、L字形を呈する。規模は現状で0.7m、幅0.35m、深さ0.15mを測る。出土遺物はない。

S D 15 (第22図)

2区の東端に位置し、L字形を呈する。規模は現状で2.85m、幅0.25m、深さ0.18mを測る。出土遺物はない。

5. 柱穴出土遺物

S P 26 (第24図)

弥生土器 (097) 甕である。口縁部は垂下気味で、頸部直下及び胴部に断面M字形の凸帯が巡る。丹塗りが施され、復元内口径24.0cm、外口径32.0cmを測る。

S P 27 (第24図)

弥生土器 (098) 甕の底部である。色調は灰橙色を呈し、復元底径9.0cmを測る。

S P 38 (第24図)

弥生土器 (099) 甕の口縁部片である。端部を僅かにつまみ上げている。

S P 40 (第24図)

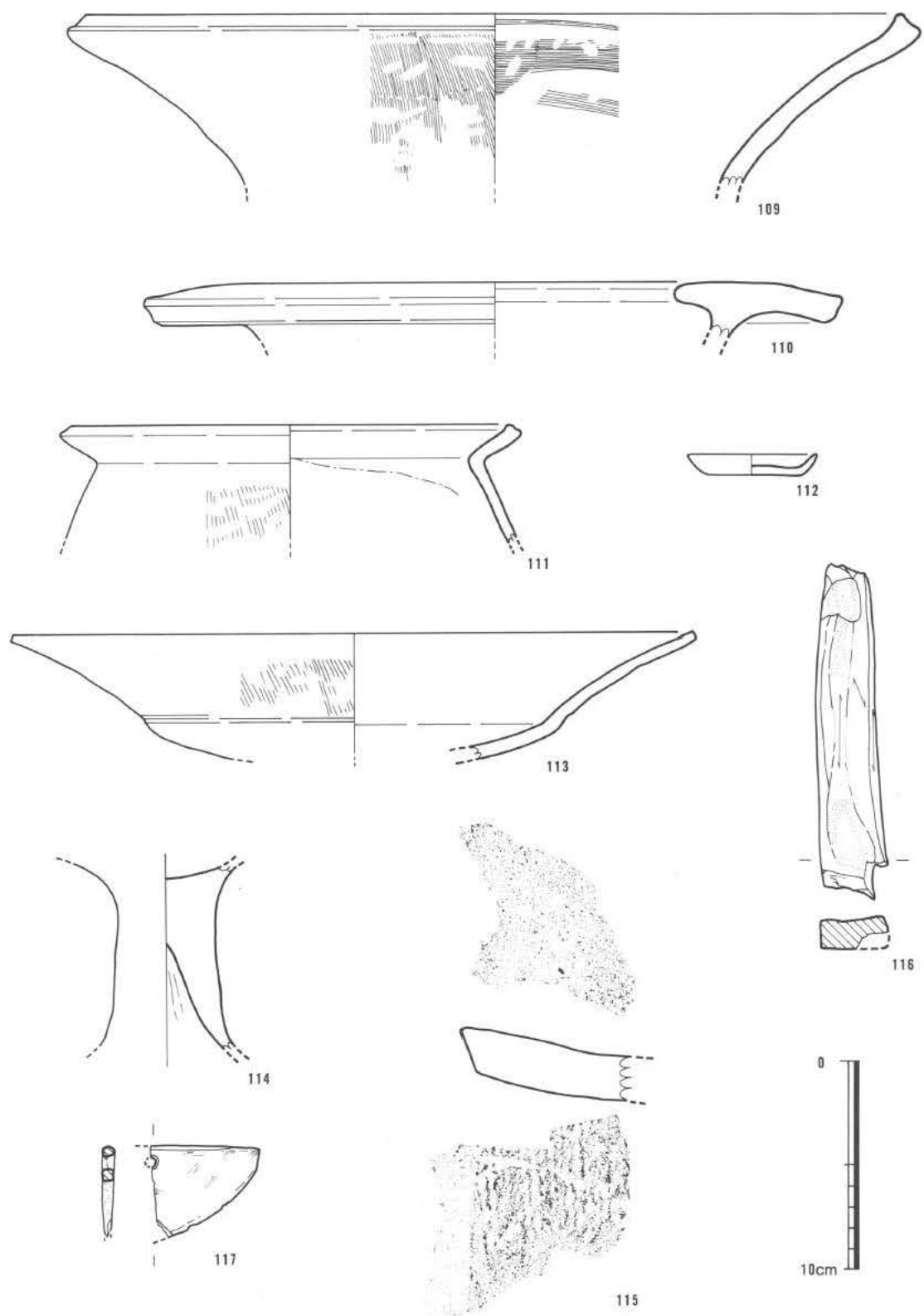
弥生土器 (100) 跳ね上げ口縁の甕である。復元口径20.6cmを測る。

土錘 (101) 色調は黒褐色を呈し、長さ3.2cm、最大径1.5cm、孔径2.0cmを測る。

S P 66 (第24図)

石包丁 (102) 破損が著しいが、穿孔は一方向から行われている。現存長5.4cm、幅4.35cm、厚さ0.5cm、孔径0.4cmを測る。

土製品 (103) 土製の丸玉のようだが、穿孔はない。長径1.5cm、短径1.3cmを測る。



第25図 その他の出土遺物実測図 (1/3)

S P 80 (第24図)

弥生土器 (104) 平底の底部片である。色調は黄橙色を呈し、復元底径10.0cmを測る。

S P 92 (第24図)

須恵器 (106) 坏蓋である。天井部は平坦で口縁部との堺に甘い沈線状の段を持つ。口縁部はやや開き、端部内面は外傾して僅かに凹む。色調は暗青灰色を呈し、復元口径13.6cmを測る。

S P 117 (第24図)

弥生土器 (107) 跳ね上げ口縁の甕である。頸部下に断面三角形の凸帯を巡らす。復元口径32.8cmを測る。

S P 123 (第24図)

瓦質土器 (108) 鍋である。外面下半には格子叩き、内面にはハケ目が施されている。色調は暗灰色を呈し、復元口径32.8cm、器高12.8cmを測る。外面には黒褐色の炭化物が付着している。

S P 134 (第24図)

弥生土器 (105) 甕の底部である。僅かに上げ底の平底で、底径6.4cmを測る。

6. その他の出土遺物

2区表土採集品 (第25図)

弥生土器 (109) 大形壺の口縁部であろう。口縁端部を跳ね上げている。内外面ともハケ目調整である。復元口径38.8cmを測る。

2区包含層採集品 (第25図)

弥生土器 (110・111) 110は壺の口縁部であろう。肉厚で垂下気味の鋤先状口縁を呈する。口唇部に丹塗りが僅かに残り、復元内口径17.3cmを測る。111は跳ね上げ口縁を呈する甕である。色調は明橙色で、体部外面には丹塗りが僅かに残り、内面には丹塗りの剥落したと考えられる痕跡が残る。復元口径20.9cmを測る。

土師器 (112) 完形の糸切り底の小皿である。口径6.2cm、器高1.0cm、底径4.4cmを測る。

2 区採集品（第25図）

土師器（113・114） 113は高坏の坏部片である。屈曲部には沈線状の段を持ち、緩やかに外反して大きく開く。風化が進んでいるが、外面にはヘラ研磨の痕跡が残る。復元口径32.4cmを測る。114は高坏の柱状部である。

瓦（115） 布目瓦の小片である。平瓦で表面には布目、裏面には縄目叩きが残るが、風化が著しい。

石器（116・117） 116は黒色頁岩製の砥石である。断面は長方形を呈し、仕上げ砥である。現状で、全長16.2cm、幅3.3cm、厚さ1.6cmを測る。117は頁岩製の石包丁の破片である。穿孔は1ヶ所残存し、両側からの穿孔である。

第3章 ま と め

1. 各遺構の概要

ここでは主な遺構について整理しておきたい。

竪穴住居は7棟検出されているが、周壁が完存するものはない。SB1・2は出土遺物は僅かで混入品も多いようであるが、ここでは中期末～後期初頭として捉えておきたい。

SB3出土土器群は、庄内式並行期のいわゆる近畿伝統的第V様式系のものがきわめて多い。甕底部の形状などを見ると型的にはやや幅があるが、おおむね柳田編年土師器I式（註1）、井上編年弥生後期3式（註2）、佐々木編年松木II期（註3）に収まるもので、那珂川町松木遺跡138街区2号住居址（註4）に類例を求めることができる。また、松木遺跡や福岡市多々良込田遺跡などでは、この様式の土器群でのみ構成された住居群が調査されており、畿内系移住集団の集落である可能性が指摘されている（註5）。本遺跡は調査面積が限られており、1棟のみの検出であったが、今後とも周辺の調査には留意しなければならない。

土坑は弥生中期から後期にかけての遺物を出土するものがほとんどである。SK6・10・14は中期末から後期初頭と考えられるが、他は小片が多く時期を決定するには躊躇される。SK13の獣骨は成獣の牛であるが、残念ながら時期を比定できる共伴遺物がない。SK14との切り合い関係から弥生中期末～後期初頭を遡らず、埋土の質感から近・現代のものではないようだ。

SE1は今回の調査では最も新しい遺構で、鍋・鉢の形態などから15世紀後半～16世紀初頭頃と考えている。同時期の建物跡などは検出していないが、柱穴出土遺物（108）には15世紀に降るものもあり、今後の周辺調査に期するところが大きい。

2. S D 2 出土の勾玉について

勾玉（第23図090）は、本遺跡のL字形を呈する溝状遺構S D 2（第21図）のL字に曲がる位置から出土した。当遺構は削平により、深さ5 cm程を残すもので、共伴遺物は皆無であったが、本品の形態や色調などに特徴がみいだせることから本稿で扱うものとする。

本品の形態は、正面観が長さ34mm、幅21mmの長台形、断面形が厚さ6 mmの扁平な長方形である。中央に径4 mmの孔を両面より穿ち、下底中程には、袂を施して左右にかえり状の突起をつくる。表裏には、上部とかえり状の突起付根にそれぞれ2条の沈線を横位に配し、上底に3条の沈線を刻む。この文様構成は、縄文後・晩期の装身具、土偶などの呪術的性格をもつ品々と様相を同じくするもので、東北から日本海沿岸を中心とする地域で多用されている。本品を勾玉とするには、古墳時代にみる従来の定型的な勾玉とは、あまりにかけ離れた異形のものであるため、一見認め難いところであるが、形状断面が扁平なところや櫛歯状の刻みを施すことなどから森貞次郎氏の弥生勾玉考（註6）のなかで、縄文系の玉とされる獣形勾玉あるいは緒締形勾玉のいずれかに分類されるものと考えている。

本品の石材は、乳白色と緑色が斑点模様に混入し、一部黒色を発する部位も認められるが、全体の色調は、淡い緑色を発する。肉眼で乳白色に緑色が混入する色調をみせる石材には、硬玉・軟玉・苦灰石・蛇紋岩・アマゾナイト（天河石）などがある。この中には一見して判別のつくものとそうではないものがあるが、特に製品として加工されたものでは肉眼の判別は難しい。本品も肉眼では、硬玉・アマゾナイトと判別したが確定はできなかったため、比重測定およびX線マイクロアナライザー（EPMA）による原材料判定を行った。以下、測定方法ならびに結果を記述する。なお、測定には、考古学的肉眼判別と測定結果を比較するために本品と同色を示す大井三倉遺跡出土品2点を用いることとした。

比重測定（第1表）は、まず、それぞれの試料の重量を天秤計りで計測し、つぎに各試料を水の入ったメスシリンダーに入れて増えた水の体積を計る。ここで求めた計測値から重量を体積で除して比重を求めた。重量・体積については、5回計量した結果の平均値をもって値とした。測定の結果、本品は、比重2.7の値を得た。これは、硬玉の比重3.3～3.5を下回る値であり、アマゾナイトの比重2.54～2.57に近似、本品の原材料が、硬玉ではなくアマゾナイトである可能性を示した。大井三倉遺跡の第4号墳・第5号墳試料は、肉眼観察で硬玉

表1 試料分析一覧

遺跡名	遺構名	出土遺物	重量(g)	体積(g)	比重	肉眼判別	比重判別	X線マイクロアナライザーによる判別
光岡辻ノ園	S D 2	勾玉	6.8	2.50	2.7	硬玉・アマゾナイト	アマゾナイト	アマゾナイト
大井三倉	第4号墳	勾玉	14.3	4.20	3.4	硬玉	硬玉	玉(霞石の可能性有)
大井三倉	第5号墳	勾玉	1.2	0.40	3.0	硬玉	軟玉	軟玉

表2 X線マイクロアナライザーによる測定結果

試料名／元素	Si	Al	Na	K	Ca	Fe	Mg	Ti	Mn	S	判 定
三岡辻ノ園1区 S D 2	1994	2906	27	1455	23	—	—	—	—	—	アマゾナイト
大井三倉4号墳勾玉	2085	1323	146	16	153	23	21	19	3	3	玉
大井三倉5号墳勾玉	3146	1454	235	38	1431	115	293	19	4	2	玉

としたが、比重測定で第4号墳試料が硬玉の比重3.4、第5号墳試料で軟玉の比重3の値を示し、第4号墳は、肉眼どおり、第5号墳試料は、軟玉と考えられる。

X線マイクロアナライザーによる分析は、電子線を試料に照射して発生する特性X線を分光し、そのX線強度を測定して化学組成を定量化するものである。今回は、25KVの加速電圧と20NAの試料電流で分析を行った。分析は非破壊であり、スタンダード強度を計測していない半定量分析である。測定の結果、本品は、珪素(Si)、アルミニウム(Al)、カリウム(K)を多く含むことが判明した。この元素は、微斜長石「 KAlSi_3O_8 」の主成分であり、本品が微斜長石であることを示す。この微斜長石のうち、緑色を発色するものがアマゾナイトであり、緑色を呈する本品は、アマゾナイトで間違いないと考えられる。

大井三倉遺跡4号墳・5号墳試料は、Si、Al、カルシウム(Ca)、ナトリウム(Na)が多く、軟玉「 $\text{Ca}_2(\text{Mg,Fe})_5\text{Si}_8\text{O}_{22}$ 」と硬玉「 $\text{NaAlSi}_2\text{O}_6$ 」の主成分であることが判明し、試料が硬玉と軟玉の混合物「玉」であることを示している。中でも5号墳試料は、Caの値が多く、軟玉に近いものと考えられ、比重測定結果と符合する。また、4号墳試料は、Na、Al、Siを主成分とする霞石「 $(\text{Na,K})\text{AlSiO}_4$ 」の可能性が考えられる。

以上、比重測定・「EPMA」で、本品がアマゾナイトを原材料とする勾玉であることが判明したが、肉眼の判別には若干の疑問が残ることもみえた。しかし、この疑問も比重測定や「EPMA」のような簡単な測定により、随分精度を上げることができ、特に硬玉や軟玉、アマゾナイトについて、その比重の違いで判別でき、有効な判別方法であると考えられる。

アマゾナイト製の玉は、私見ではあるが、今のところ、宗像郡津屋崎町今川遺跡や韓国の大田直轄市槐亭洞遺跡など23遺跡(第3表)が朝鮮半島を中心に中国の遼寧省、北部九州の一部に分布することが知られている。いずれの遺跡も遼寧式銅剣や細形銅剣を伴う時期が被定されており、弥生前期の範疇におさまる。また、縄文系の玉とされる獣形勾玉や緒締形勾玉の類は、弥生時代を下ったの出土をみないことから、本品が弥生時代の遺物である可能性を推定できるものと思われる。

末筆ながら、北九州市立自然史博物館藤井厚志・岡崎美彦の両氏にはSK13出土獣骨の鑑定やSD2出土勾玉の石材について有益なご教示を得た。さらに福岡教育大学の上野禎一氏にはSD2出土勾玉の石材鑑定を快く引き受けていただいた。記して謝意を表したい。

表3 アマゾナイト(天河石)製玉類出土地名表

番号	遺 跡 名	所 在 地	遺 構	種類	個数	分類(註7)	備 考
1	松菊里石棺墓	忠清南道扶餘郡草村面松菊里	石 棺 墓	勾 玉	2	3 類	銅剣・銅鏃(遼寧式銅剣の再利用)・磨製石剣など共伴
2	南 城 里 遺 跡	忠清南道牙山郡南城里	石 積 墓	勾 玉	1	2 類	多鈕細文鏡・細形銅剣など共伴
3	槐 亭 洞 遺 跡	大田直轄市槐亭洞	石積石棺墓	勾 玉 小 玉	2 50 余	2 類	黒陶長頸壺・粗文鏡・銅剣など共伴
4	蓮 花 里 遺 跡	忠清南道扶餘郡蓮花里	石 棺 墓	勾 玉	1	2 類	多鈕細文鏡・細形銅剣など共伴
5	久 瑞 洞 遺 跡	釜山直轄市金井区久瑞洞	木 棺 墓	勾 玉	1	1 類	無文土器・瓦質土器など共伴
6	新村里遺跡Ⅵ区	慶尚南道義昌郡新村里	1号石棺墓	勾 玉	2	4 類	凝灰岩製管玉・青銅製丸玉が共伴
7	上紫浦里遺跡	京畿道楊平郡上紫浦里	1号支石墓	勾 玉	1	1 類	無文土器・紅陶・細形銅剣など共伴
8	龍 興 里 遺 跡	平安南道价川郡龍興里	石 棺 墓?	勾 玉	1	1 類	遼寧式銅剣・青銅刀子・石斧など共伴
9	燕 巖 山 遺 跡	大邱直轄市北区燕巖山		勾 玉	1	1 類	
10	鷹 峰	ソウル市城東区鷹峰洞		勾 玉	1	1 類	半円形石刀・石鍬など共伴
11	草 浦 里 遺 跡	全羅北道全州草浦里		勾 玉	2	2 類	
12	盈 德 烏 浦 洞	慶尚北道盈徳郡烏浦洞		勾 玉	2	3 類	
13	牛山里ネウ支石墓		8号支石墓	勾 玉	1	3 類	文献(註8)
				勾 玉	1	4 類	
				丸 玉	6		
14	東西里石棺墓	忠清南道礼山郡大興面東西里	石 棺 墓	丸 玉	20 余		銅剣・剣把形銅器・喇叭形銅器・銅鏡など共伴
15	鄭 家 窪 子	遼寧省沈陽縣鄭家窪子	6512号墓	勾 玉	1	1 類	粗 文 鏡・ 銅 剣 な ど 共 伴
16	白 岩 里 遺 跡	忠清南道牙山郡白岩里		勾 玉	1	1 類	無 文 土 器 と 共 伴
17	北 倉 大 平 里	平安南道北倉郡大平里	1号石棺墓	勾 玉	1	1 類	文献(註9)
			9号石棺墓	勾 玉	1	1 類	
			4号石棺墓	勾 玉	1		
18	馬 山 城 山			勾 玉	1		文献(註8)
19	鳳儀煙台峰遺跡	咸鏡北道会寧郡碧城面永綏洞煙台峰	4号土壙墓	管 玉	6		文献(註10)
20	松 坪 洞 遺 跡	咸鏡北道雄基郡松坪洞	土 壙 墓	勾 玉	1		彩文壺・文献(註10)
21	チョンチン洞支石墓	黄 海 道 黄 州 郡 沈 村 里	石 棺 墓	管 玉	1		
22	今 川 遺 跡	宗像郡津屋崎町今川	包 含 層	勾 玉 丸 玉	1 1	1 類	
23	光岡辻ノ園遺跡	宗像市大字光岡965-1	S D 2	勾 玉	1	1 類	
24	(伝) 晋州地方	李養璿博士収集品		勾 玉	5	1 類	
	(伝) 晋州地方	李養璿博士収集品		勾 玉	2	2 類	
	李養璿博士収集品	李養璿博士収集品		丸 玉	数点		

註

(註1) 柳田康雄1991「土師器の編年 2九州」『古墳時代の研究6』雄山閣

(註2) 井上裕弘1991「北部九州における古墳出現期前後の土器群とその背景」『古文化論叢』児島隆人先生喜寿記念論集

(註3) 佐々木隆彦1984「Ⅵ2松木遺跡出土土器の展開」『松木遺跡Ⅰ(下巻)』那珂川町文化財調査報告書第11集

(註4) 那珂川町教育委員会1985『松木遺跡Ⅱ』那珂川町文化財調査報告書第12集

(註5) 前掲(註2)

(註6) 森貞次郎1980「弥生勾玉考」『古文化論叢』鏡山猛先生古希記念

(註7) 李健茂1991「装身具」『日韓交渉の考古学』弥生時代篇 小田富士雄・韓炳三編六興出版

(註8) 全榮爽1991「韓国青銅器文化の系譜と編年」『韓国青銅器時代文化研究』新亞出版社

(註9) チョンチャンヨン1974「北倉郡大坪里遺跡発掘報告」『考古学資料集』第4集社会科学出版社

(註10) 樫本杜人1980「先史遺跡の研究」『朝鮮の考古学』同朋舎出版

表4 光岡辻ノ園遺跡遺構一覧

竪穴住居

遺構番号	地区	平面形	長辺×短辺(m)	残存深(cm)	主柱穴数	周壁溝	屋内土	屋外排水溝	備考(切り合い関係ほか)	挿図番号
SB 1	1	円形	復元径6.0	50	4(6)	○	○	不明		5図
SB 2	1	円形	復元径5.2	25	4	○	○	不明		5図
SB 3	2	方形	4.2×3.5 α	10	不明	○	○	不明	SB 4→SB 3	7図
SB 4	2	方形	3.65 α ×0.7 α	10	不明	○	不明	不明	SB 4→SB 3	7図
SB 5	2	円形	不明	15	不明	○	○	不明	SB 5→SB 6	7図
SB 6	2	円形	不明	15	不明	○	○	不明	SB 5→SB 6	7図
SB 7	2	円形	不明	10	不明	○	不明	不明		12図

土坑

遺構番号	地区	平面形	長径×短径(m)	残存深(cm)	備考(切り合い関係ほか)	挿図番号
SK 1	1	不明	0.95 α ×0.75 α	35		13図
SK 2	1	不整形	0.58×0.53	5		13図
SK 3	1	不整形	0.85×0.4	10		13図
SK 4	1	不整楕円形	0.52×0.4	20		13図
SK 5	1	楕円形	0.7×0.55	5		13図
SK 6	1	不整楕円形	2.3 α ×1.9 α	85		13図
SK 7	1	隅丸長方形	0.68×0.51	25		13図
SK 8	1	隅丸長方形	0.6×0.38	10		13図
SK 9	1	楕円形	0.62×0.53	15		13図
SK10	1	不整形	0.9 α ×0.6	30		13図
SK11	1	隅丸方形	1.28×1.15	30		15図
SK12	1	不整楕円形	0.78×0.49	10		15図
SK13	1	隅丸方形?	1.28×1.04 α	40		15図
SK14	1	不整隅丸台形	1.1 α ×0.95	40		15図
SK15	1	隅丸長方形?	0.95 α ×0.64	15		15図
SK16	1	楕円形	0.93×0.84	20		15図
SK17	2	不整形	1.9 α ×1.3 α	55	SB 3 下層土坑	7図
SK18	2	長楕円形?	0.7 α ×0.4	55		18図
SK19	2	不整楕円形	0.65×0.5	30	SB 4 or 5 の屋内土坑	7図
SK20	2	不整楕円形	0.55×0.45	17	SB 4 or 5 の屋内土坑	7図
SK21	2	不整形	0.95×0.75	5		18図
SK22	2	不整形	0.82×0.45	15		18図

井戸

遺構番号	地区	平面形	長径×短径(m)	残存深(cm)	備考(切り合い関係ほか)	挿図番号
SE 1	2	不整円形?	2.45 α ×1.0 α	145		19図

溝状遺構

遺構番号	地区	平面形	長さ×幅(m)	残存深(cm)	備考(切り合い関係ほか)	挿図番号
SD 1	1	略 L 字形	1.6 α ×0.3	10		21図
SD 2	1	L 字形	1.35 α ×0.3	5	アマゾナイト製勾玉	21図
SD 3	1	直状	1.2 α ×0.3	10		4図
SD 4	1	L 字形	1.5 α ×0.35	45		4図
SD 5	1	略弧形	0.8 α ×0.2	10		4図
SD 6	1	直状	0.85 α ×0.2	10		4図
SD 7	2	直状	1.9 α ×0.18	5		22図
SD 8	2	略直状	1.4 α ×0.28	10		22図
SD 9	2	略直状	1.65 α ×0.3	10	遺物なし	22図
SD10	2	直状	2.0 α ×0.22	6		22図
SD11	2	蛇行状	2.45 α ×0.3	6		4図
SD12	2	L 字形	1.85 α ×0.32	10	遺物なし	4図
SD13	2	略 L 字形	2.05 α ×0.25	15		22図
SD14	2	L 字形	0.7 α ×0.35	15	遺物なし	4図
SD15	2	L 字形	2.85 α ×0.25	18	遺物なし	22図

付 ^{みつおかながは} 光岡長把遺跡採集遺物

1. 発見の経緯

昭和55年、南郷地区圃場整備にともなう水路工事中に出土し、工事業者によって宗像市教育委員会に持ち込まれたものらしい。宗像市に文化財担当職員が配置される直前でもあり、出土状況や正確な出土地点は不明だが、ラベルには現在のJ A宗像ライスセンター北側付近であることが記されている。採集資料ではあるが、埋もれたままにしておくには忍びない重要遺物と考え、また今回報告した光岡辻ノ園遺跡の周辺遺跡でもあることから、ここに報告する次第である。

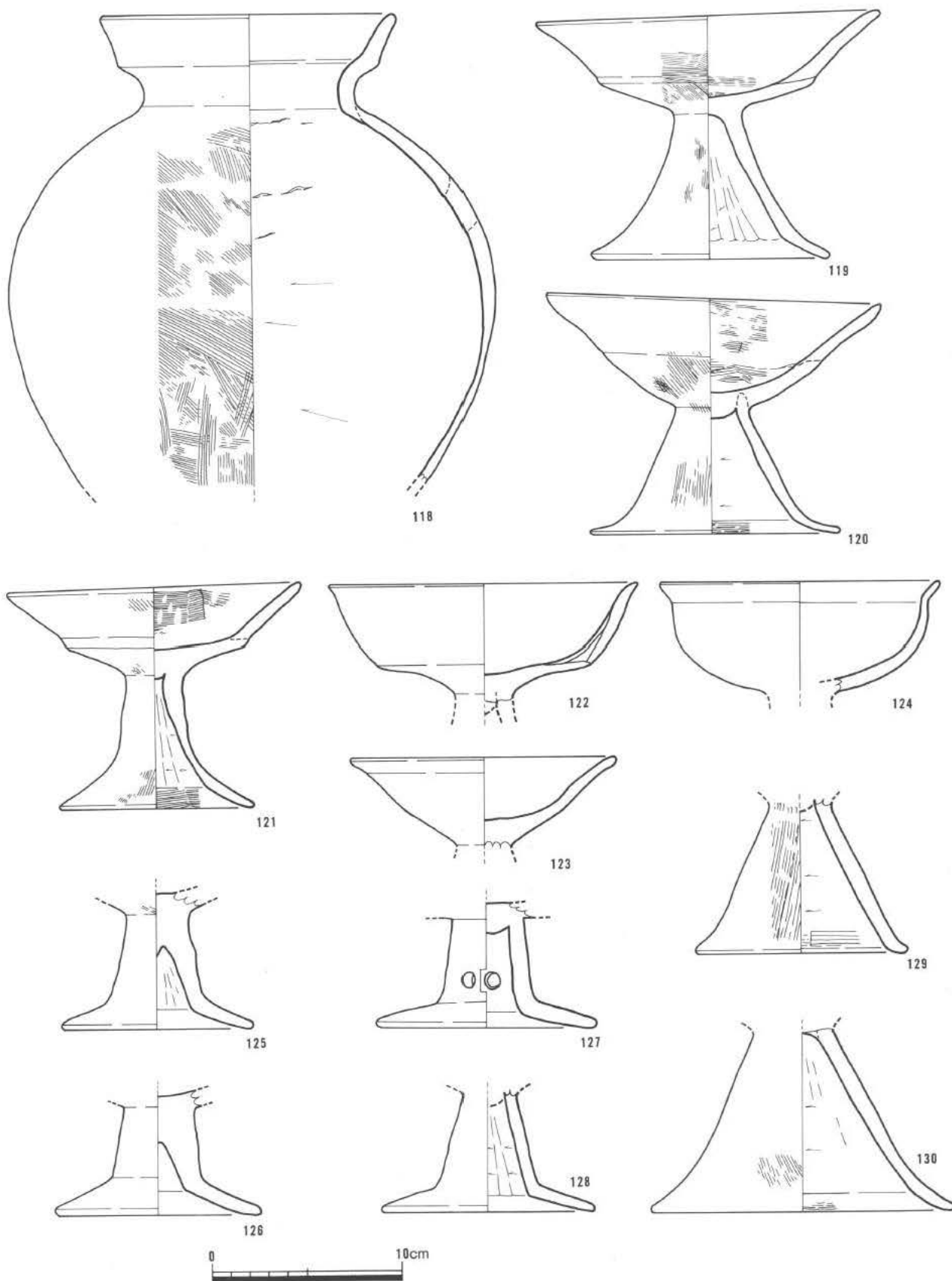
2. 位置と環境

本遺跡は、釣川の支流である高瀬川と朝町川に挟まれた標高9～12mほどの段丘上に立地している。肥沃な低地のほぼ中央を南北に延びるこの低台地は、重要遺跡の立地条件を良く備えているものの、すでに圃場整備が終了しているため調査例はほとんどなく、実態は不明である。舌状に延びる低台地の地形も圃場整備によってかなり失われているが、台地を東西に横切る県道は緩やかな起伏を残し、旧地形を伺うことができる。

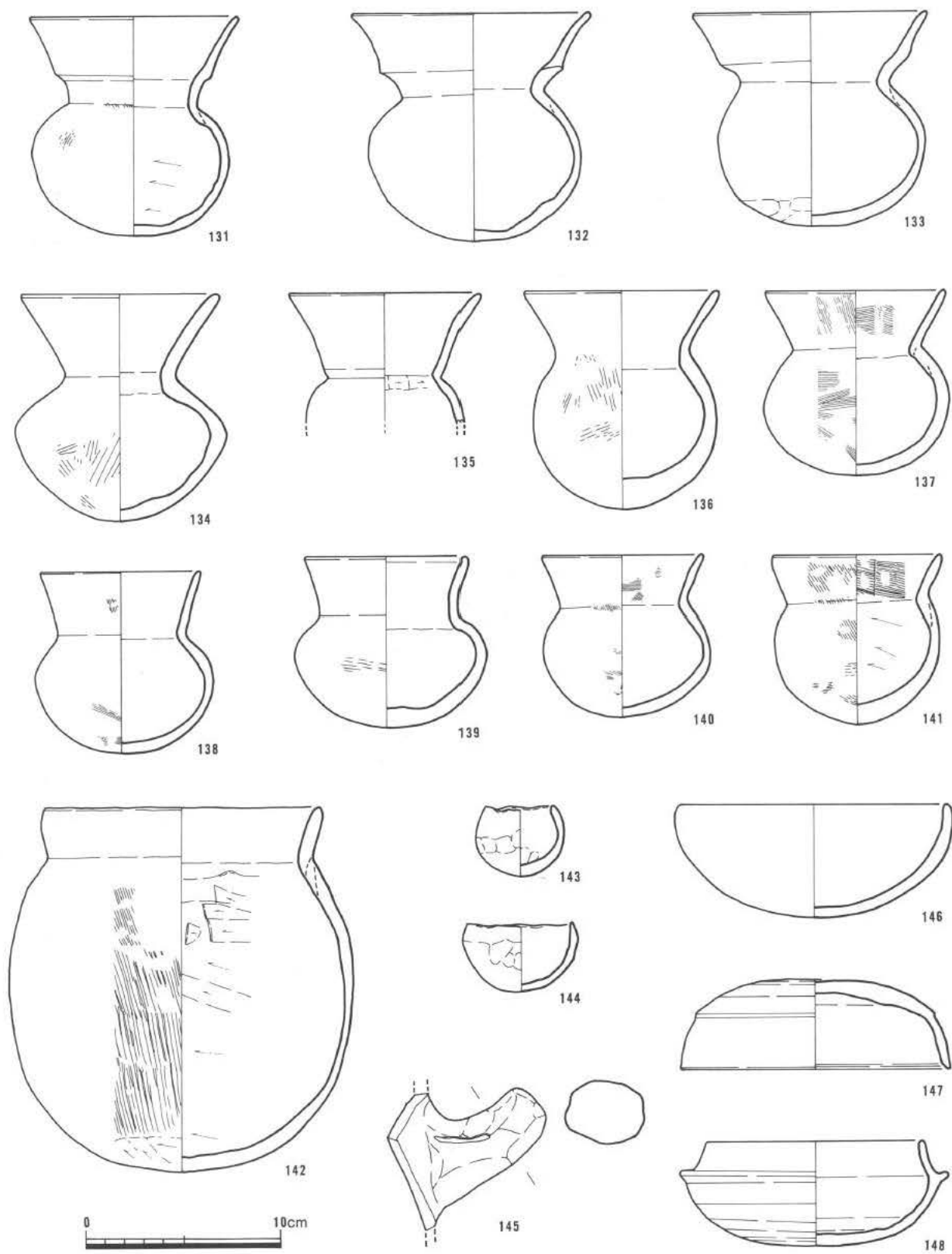
3. 遺物の概要

採集された遺物はパンケースに10箱ほどあり、完形に近い土師器が大半を占め、僅かに須恵器がある。今回、すべてを報告することは困難であったため、図化にあたっては完形品に片寄らず、できるだけ多くの型式・形式を含むように抽出した。土師器の器種には壺、甕、高坏、坏、手づくね土器、甑か鉢の把手部があり、須恵器は蓋坏のほか、図化していないが高坏の脚部片もある。

118は二重口縁の壺である。体部のやや上位に最大径を有し、2次口縁部は短く退化が進んでいる。119～130は高坏である。坏部はバラエティーに豊み、脚部は直状に大きく開くものと裾部で屈曲するものがある。131～133は二重口縁の小形壺で、口縁部の一部を欠くものがあるが、ほぼ完形品である。大きく外反する口縁部が特徴だが、類例の少ない型式である。134～141は小形丸底壺である。完形品が多く、未実測のものがかなりあるが、図示したものいづれかに分類されよう。大きく分けて口径が体部最大径を上まるもの(134～136)と、そうでないもの(137～141)とある。須恵器は147が小田編年Ⅱ期、148はⅢA期に相当しよう。遺物の時期は、概ね柳田編年土師器Ⅲa式前後から6世紀代までである。一括と言うには時期幅が広く、包含層だけではなく土坑や竪穴住居などの遺構遺物も含まれる可能性があるが、当面の資料不足を補うためには有効な遺物であろう。



第26図 光岡長把採集遺物実測図① (1/3)



第27図 光岡長把採集遺物実測図② (1/3)

表5 光岡長把遺跡採集遺物一覧

(単位: cm)

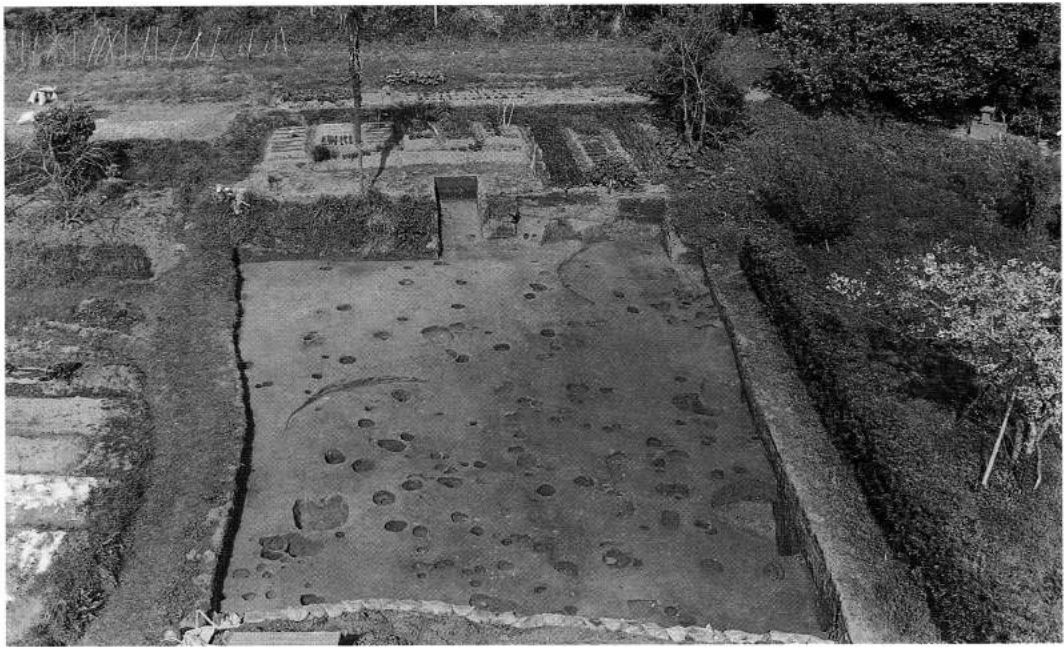
報告 番号	種類	器種	口径	器高	頸部径	体部 最大径	底部径 (脚底)	胎土	色調	内面調整	外面調整	備考
118	土師器	壺	[15.2]	25.0 α	[11.1]	[25.6]	—	細砂粒含	白橙色	荒いヘラ削り	ハケ目	2次焼成
119	ク	高坏	18.0	12.9	—	—	12.6	精良、微 細砂粒含	赤橙色	坏部ハケ目 後ナデ、脚ヘ ラ削り	坏部ハケ目 後ナデ、脚部 ハケ目、後板 ナデ?	
120	ク	ク	[17.6]	12.5	—	—	13.2	細砂粒含	ク	坏部ハケ目 後ナデ、脚ヘ ラ削り、裾ハ ケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	
121	ク	ク	15.4	11.7	—	—	10.2	ク	灰橙色	ク	ク	
122	ク	ク	[16.0]	6.2 α	—	—	—	精良	赤橙色	ナデ	ナデ	接合痕明瞭
123	ク	ク	[13.6]	4.8 α	—	—	—	やや粗	灰橙色	ク	ク	
124	ク	ク	[14.6]	6.0	—	—	—	微細砂粒含	ク	ク	ク	
125	ク	ク	—	7.3 α	—	—	10.2	細砂粒・ 赤褐色粒含	赤橙色	ヘラ削り	ナデ	
126	ク	ク	—	6.6 α	—	—	10.8	精良	明橙色	ナデ	ク	
127	ク	ク	—	6.6 α	—	—	[11.6]	精良	赤橙色	ヘラ削り	ク	穿孔3ヶ所
128	ク	ク	—	6.4 α	—	—	11.2	精良	赤褐色～ 白橙色	ヘラ削り	ク	2次焼成
129	ク	ク	—	8.2 α	—	—	11.2	砂粒含	橙灰色	ヘラ削り、裾 部ハケ目	ハケ目	
130	ク	ク	—	9.7 α	—	—	16.0	砂粒・ 小礫含	灰桃色	ク	ハケ目後ナデ	2次焼成、 風化進む
131	ク	壺	[10.6]	11.3	6.5	10.2	—	細砂粒・ 赤褐色粒含	橙色	ヘラ削り	ク	
132	ク	ク	12.0	11.8	7.2	10.8	—	細砂粒含	赤橙色～ 白橙色	ク	ク	風化進む
133	ク	ク	12.0	11.1	7.6	10.6	—	細砂粒含	灰橙色	?	ナデ、底部ヘ ラ削り後ナデ	ク
134	ク	ク	[10.0]	11.7	5.6	10.8	—	ク	赤橙色	荒いヘラ削り	荒いハケ目 後ナデ	黒斑あり
135	ク	ク	[9.6]	6.7 α	[5.8]	[8.0]	—	精良	灰橙色	ヘラ削り	ナデ	
136	ク	ク	9.8	11.3	6.8	9.4	—	砂粒多含	橙色～ 淡橙灰色	ク	荒いハケ目 後ナデ	
137	ク	ク	11.0	9.6	6.6	9.6	—	細砂粒多含	灰橙色	ク	ハケ目後ナデ	黒斑あり
138	ク	ク	8.1	9.3	6.0	9.1	—	砂粒含	白灰橙色	ク	ク	ク
139	ク	ク	8.2	8.8	7.1	9.8	—	ク	淡橙灰色	ク	ク	風化進む
140	ク	ク	8.2	8.3	6.5	8.6	—	精良、砂粒 赤褐色粒含	灰橙色	ク	ク	黒斑あり
141	ク	ク	8.6	8.7	7.2	8.4	—	細砂粒含	ク	ク	ク	
142	ク	甕	[14.0]	18.9	13.5	17.7	—	砂粒多含	赤橙色	ク	荒いハケ目、 底部ヘラ削り	粗雑な作り
143	ク	手づくね	3.4	3.6	—	4.5	—	精良	橙褐色	指ナデ	指ナデ	
144	ク	ク	5.2	3.6	—	5.9	—	細砂粒含	ク	ク	ク	
145	ク	把手	—	—	—	—	—	微細砂粒・ 赤褐色粒含	淡橙灰色	ク	ナデ	
146	ク	坏	[13.8]	5.8	—	—	—	細砂粒含	橙色	ナデ	ク	
147	須恵器	坏蓋	[13.9]	4.6	—	—	—	砂粒多含	白灰色	不定ナデ、回 転ナデ	回転ヘラ削り	焼成、やや 軟調
148	ク	坏身	11.0	5.4	受部径 13.7	—	—	—	暗青灰色	ク	ク	

圖 版

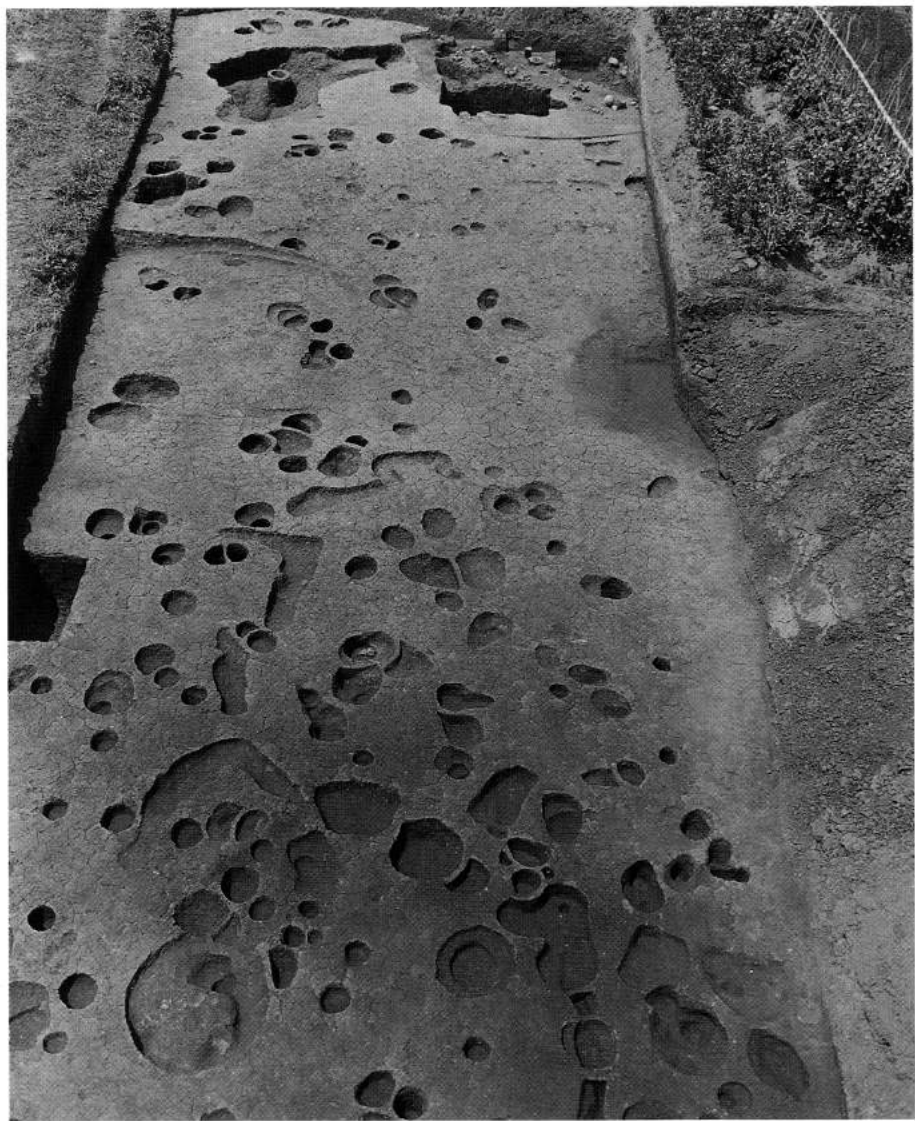


光岡辻ノ園遺跡周辺の航空写真（1/12,500）昭和53年6月撮影

図版 2



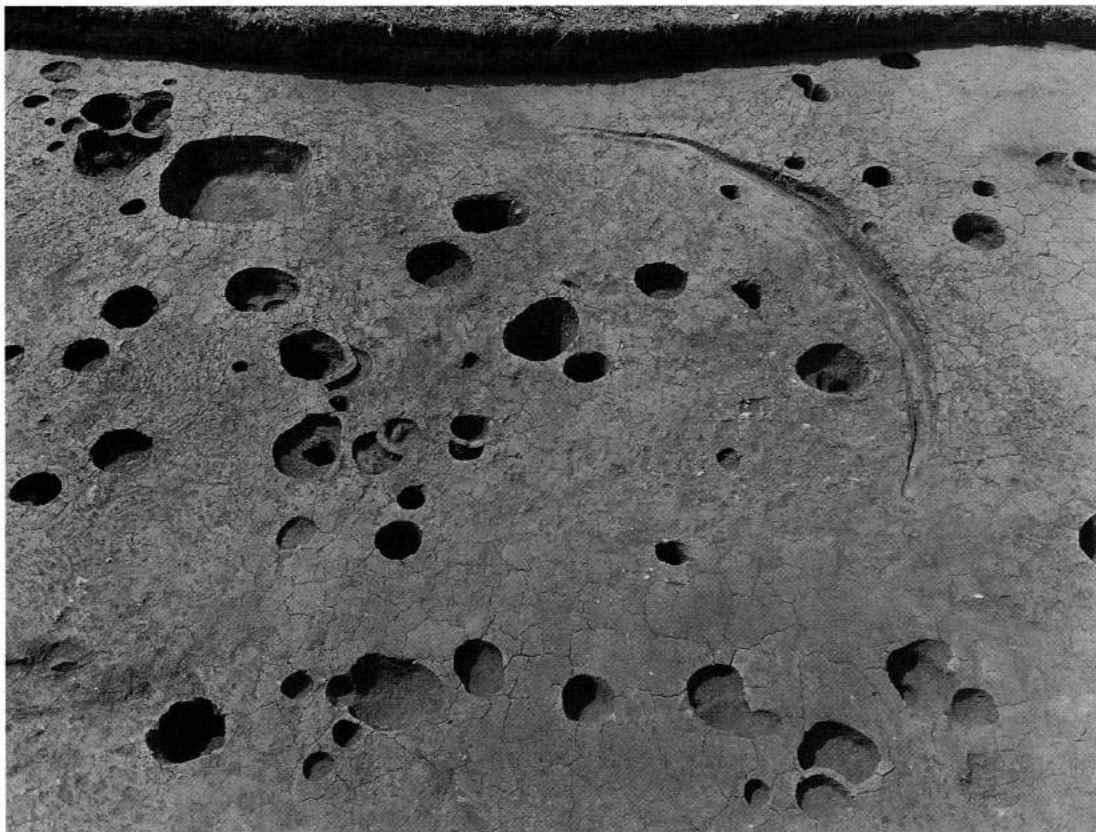
(1) 1区全景（東から）



(2) 2区全景（東から）



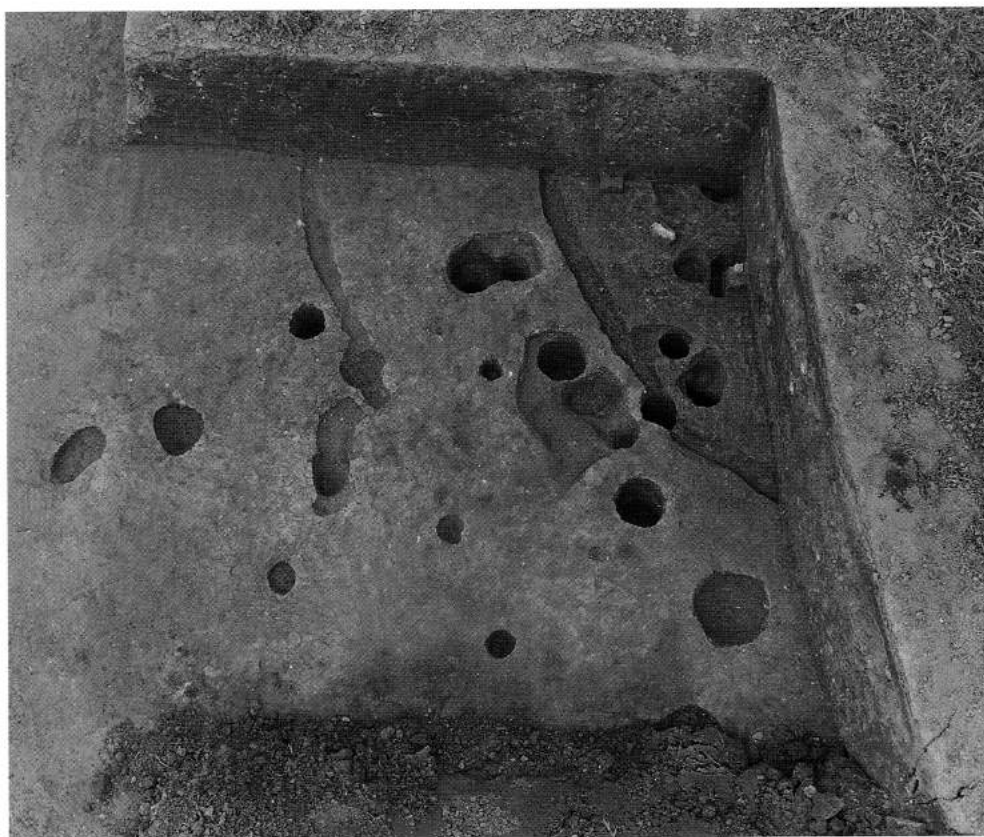
(1) 1区SB1 (南から)



(2) 1区SB2 (北から)



(1) 2区SB3・4 (東から)



(2) 2区SB7 (東から)



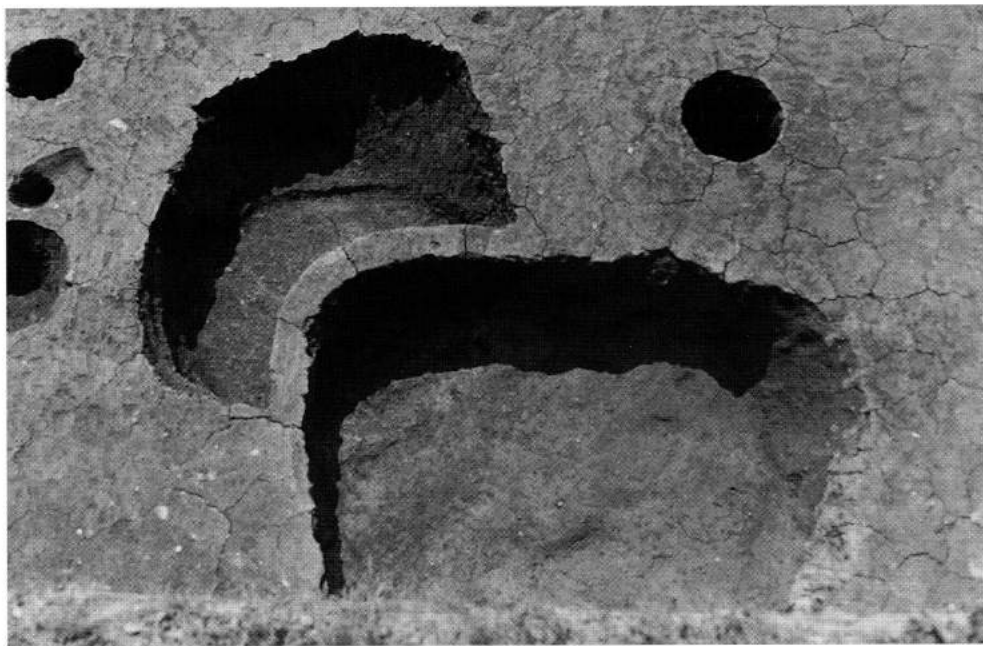
(1) 1区SK1 (北から)



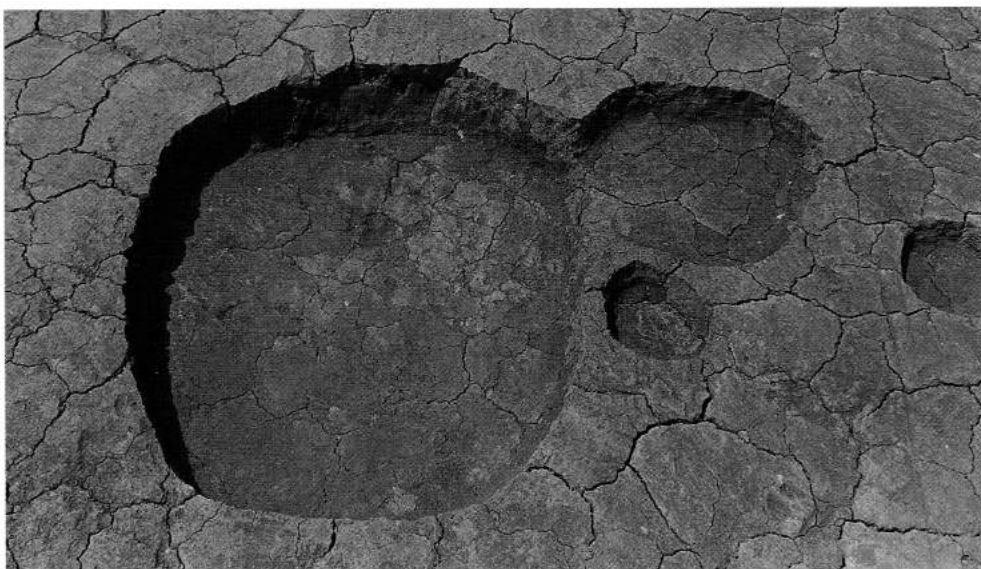
(2) 1区SK6 (東から)



(1) 1区SK13 (西から)



(2) 1区SK13・14 (北から)



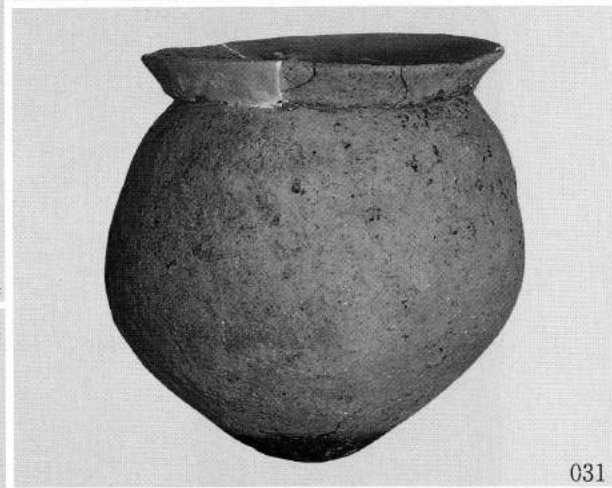
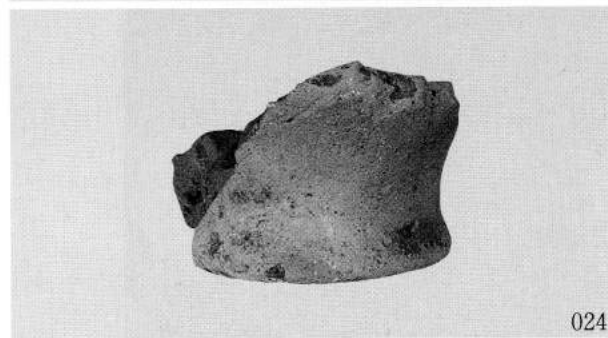
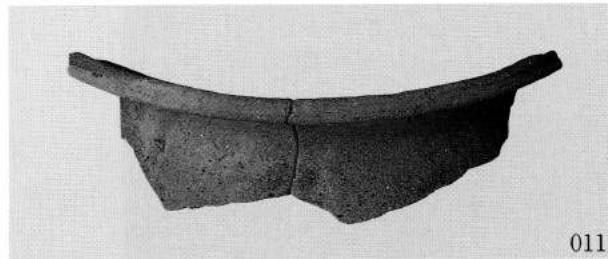
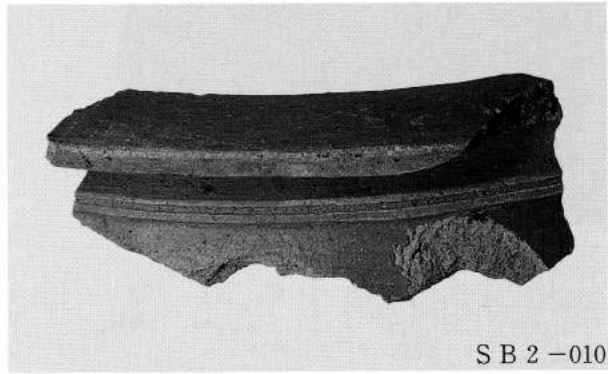
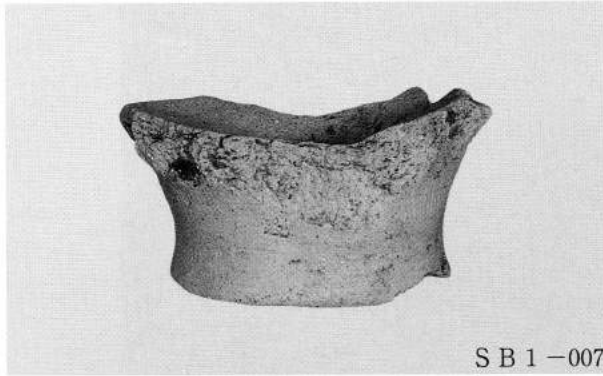
(3) 1区SK16 (東から)

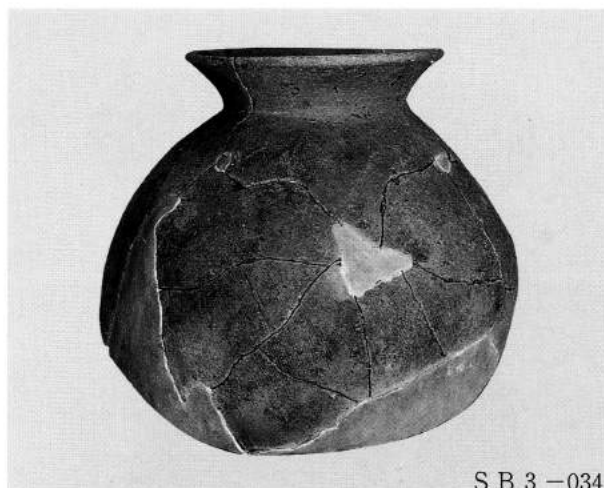


(1) 2区SE1 (南から)



(2) 1区SD2 勾玉出土状況 (南から)

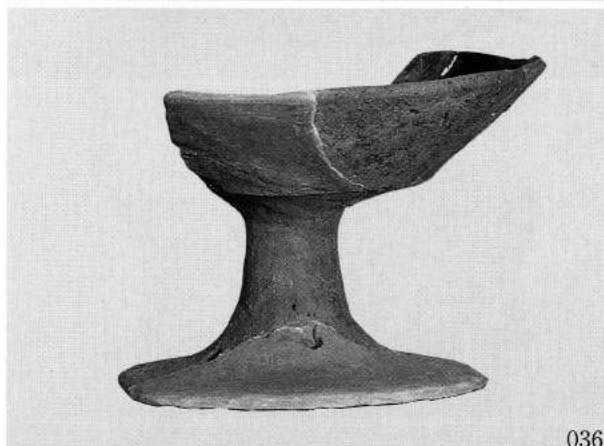




S B 3 - 034



040



036



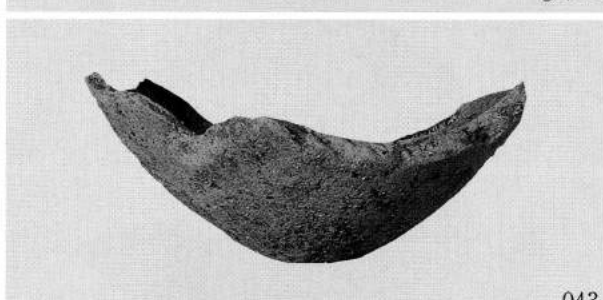
041



037



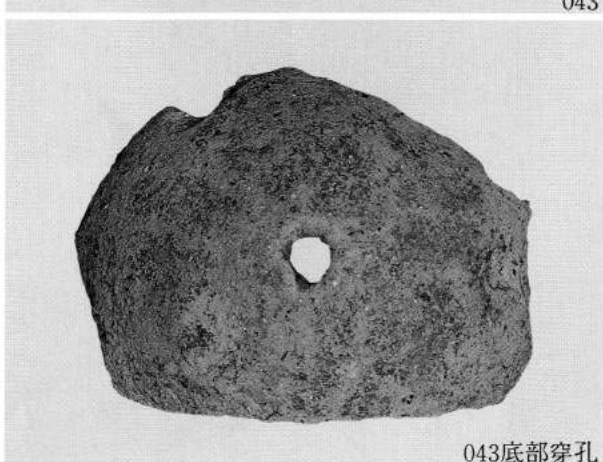
042



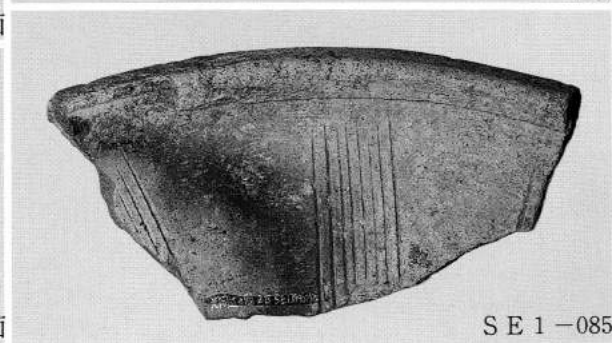
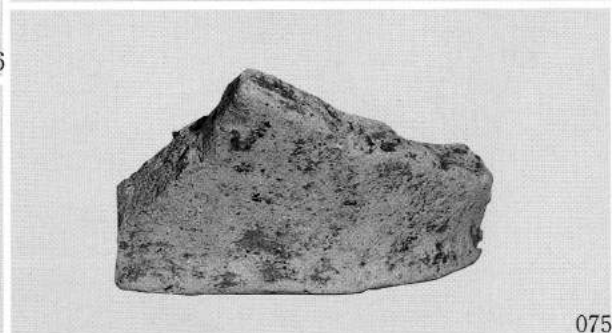
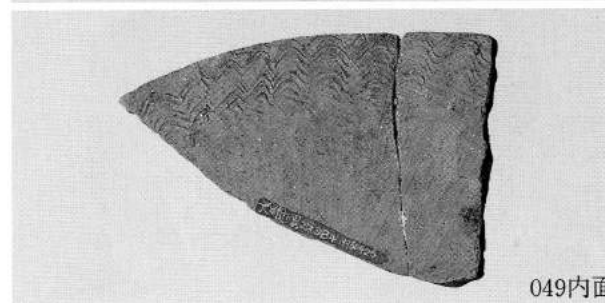
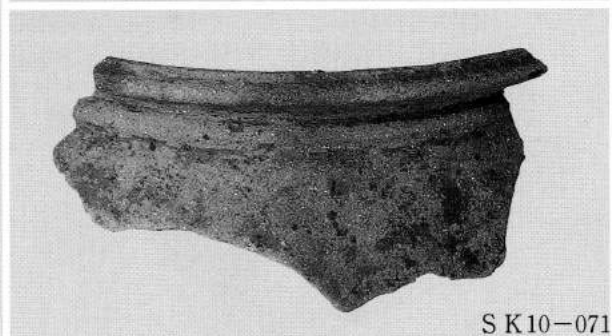
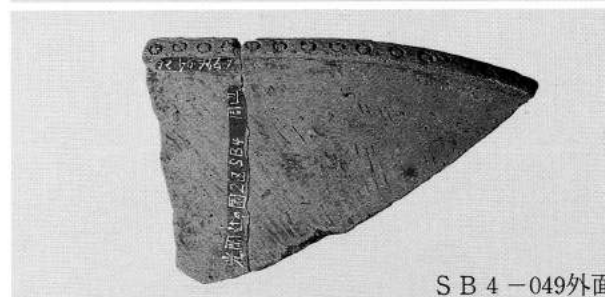
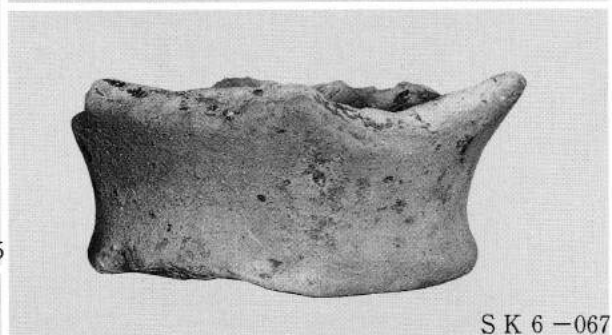
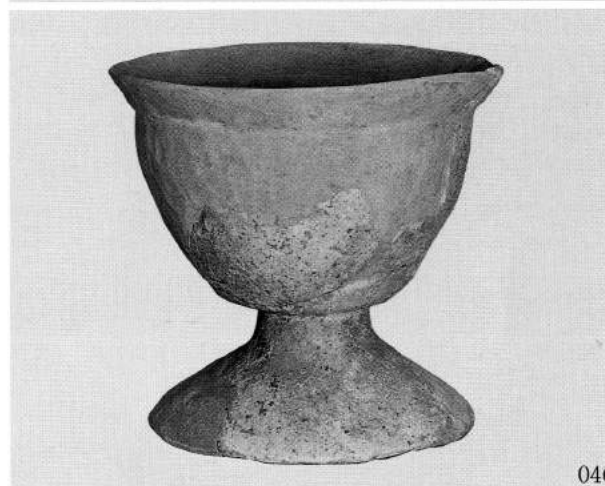
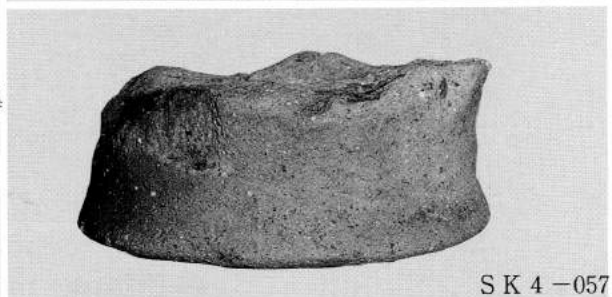
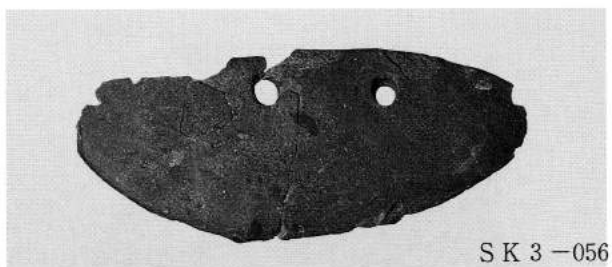
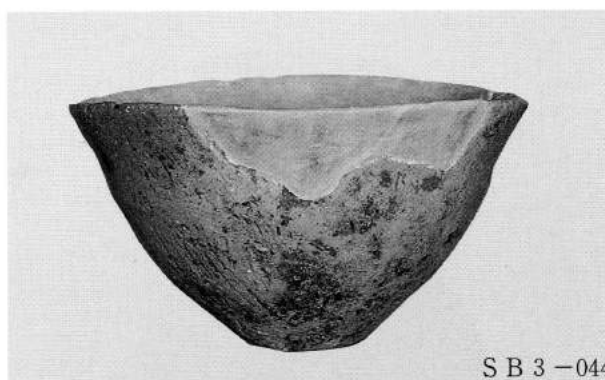
043



038

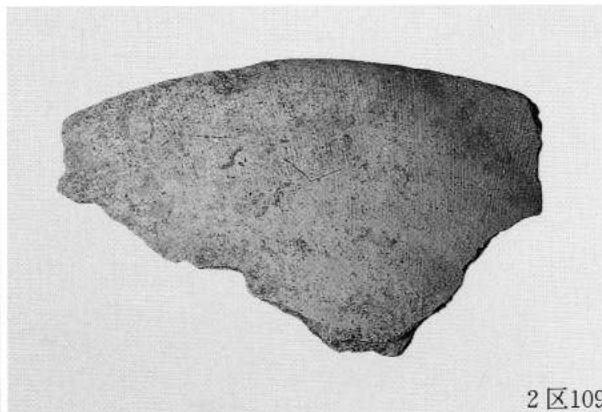


043底部穿孔

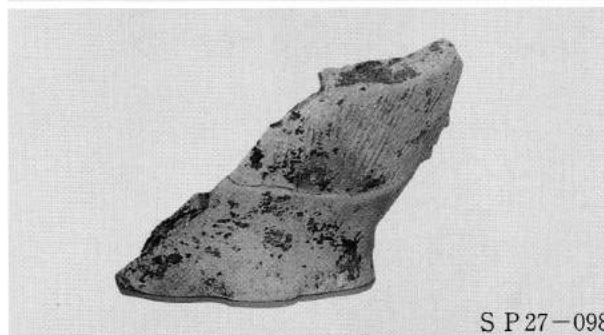




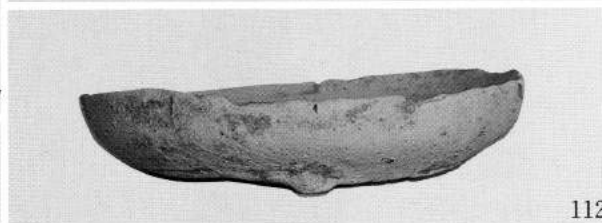
S P 26-097



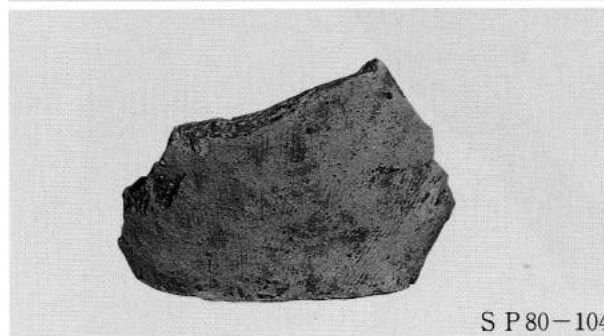
2区109



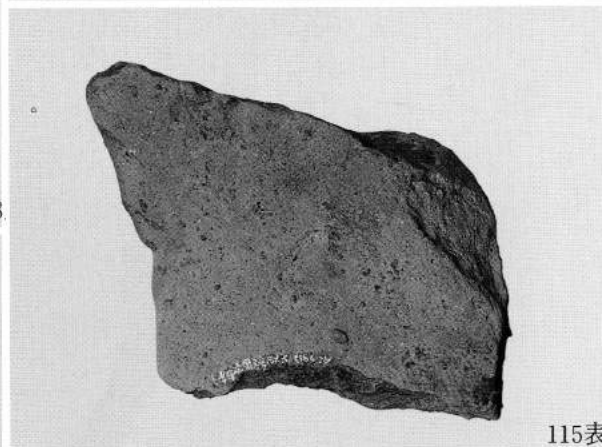
S P 27-098



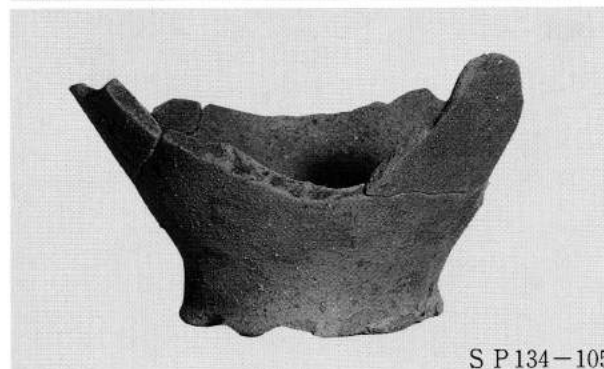
112



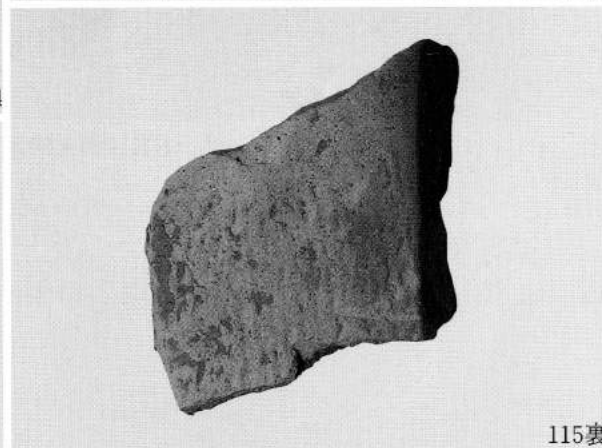
S P 80-104



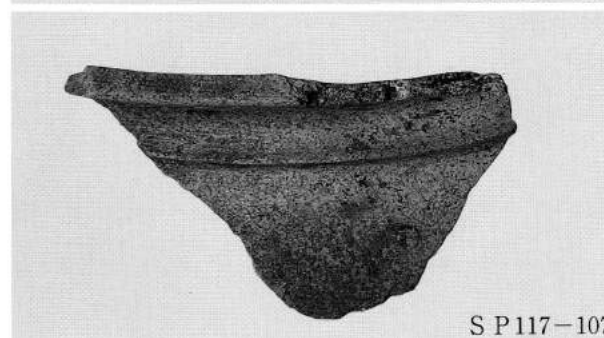
115表



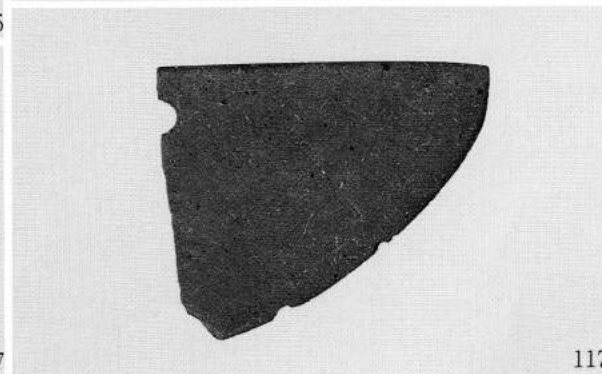
S P 134-105



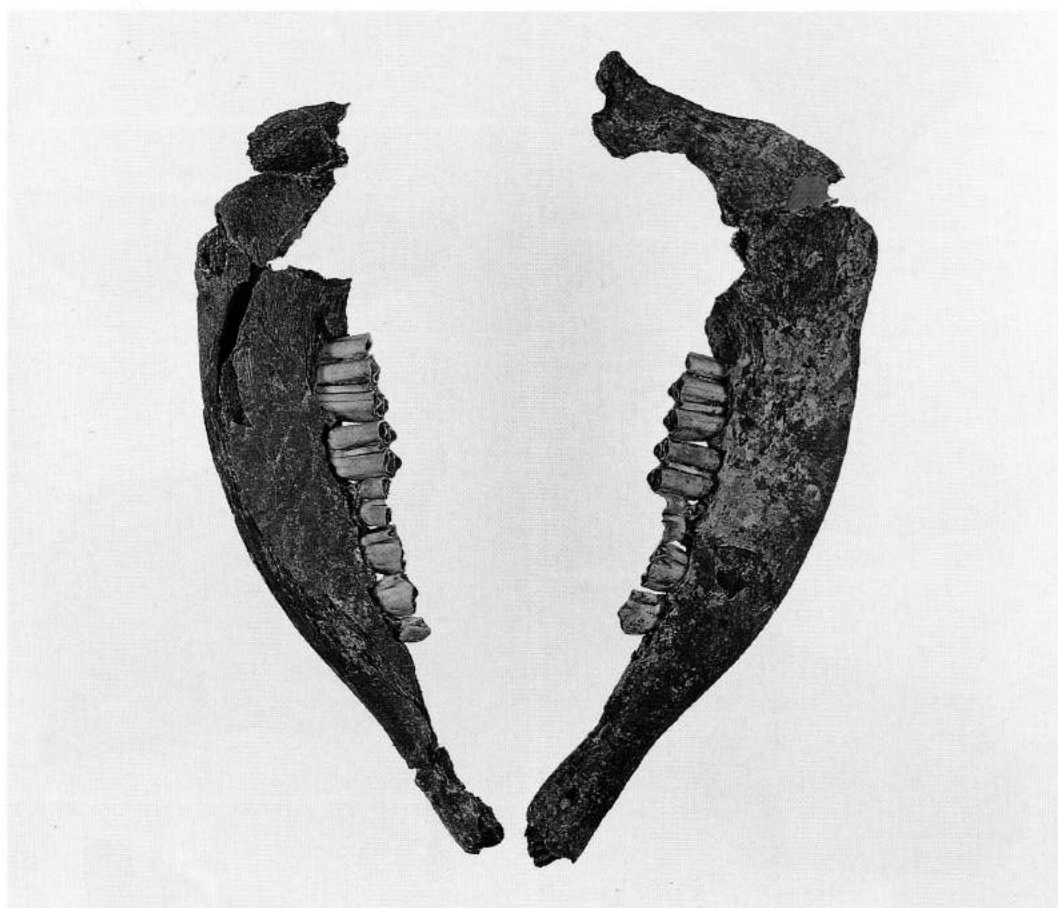
115裏



S P 117-107



117



S K13出土獣骨（成獣・ウシ）

フリガナ	ミツオカツジノソノ							
書名	光岡辻ノ園							
副書名	福岡県宗像市光岡所在遺跡の発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	宗像市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第43集							
編著者名	白木英敏・安部裕久							
編集機関	宗像市教育委員会							
所在地	〒811-3492 福岡県宗像市大字東郷995番地 TEL(0940)36-1540							
発行年月日	西暦 1998年 3月31日							
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ミツオカツジノソノ 光岡辻ノ園	ムナカタシ オオアザ 宗像市大字 ミツオカ 光岡965-1他	40220	330796	130° 33' 19"	33° 47' 05"	1996.4.1) 1996.5.3	1,142m ²	宅地及び 駐車場建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
光岡辻ノ園	集 落 跡	弥生時代) 古墳時代	竪穴式住居跡 土坑 溝状遺構 井戸	土師器・須恵器 弥生土器・勾玉		アマゾナイト製勾玉 畿内系土器		

光 岡 辻 ノ 園

宗像市文化財調査報告書

第 43 集

平成10年 3月31日

発 行 宗 像 市 教 育 委 員 会
宗 像 市 大 字 東 郷 995 番 地
印 刷 瞬 報 社 写 真 印 刷 (株)
福 岡 市 天 神 5 - 4 - 16